

市之郷遺跡

— 第14次・18次発掘調査報告書 —

2020年3月

姫路市教育委員会

序

姫路市内には、約1,200か所を数える遺跡が所在しております。本市ではこれらを貴重な歴史遺産として後世に伝えていくため埋蔵文化財の発掘調査、整理、研究や展示などの公開事業を実施し、その保存と継承に努めております。このたび発掘調査を実施しました市之郷の周辺は、弥生時代から中世にかけての市之郷遺跡をはじめ、市之郷廃寺などの主要遺跡が所在し、播磨地域の歴史を語る上で欠かすことのできない地域です。また、近年ではJR山陽本線の鉄道高架事業、阿保土地区画整理事業、キャストイ 21などの周辺の再整備事業に伴い発掘調査が実施され、遺跡の実態が明らかとなってきました。このたびの調査では、特に古墳時代の歴史を復元する上で重要な成果を得ることができ、地域の歴史解明の一助になるものと考えております。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました関係者各位に心から御礼申し上げます。

令和2年(2020年)3月

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

一 例 言

1. 本書は、兵庫県姫路市市之郷地区内で実施した市之郷遺跡(遺跡番号:020462)の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、いずれも一般財団法人 姫路市まちづくり振興機構が計画した高齢者向け住宅建設によるものである。同機関より依頼を受け、平成27年度と29年度に姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査・出土品整理の実施、並びに本報告書の刊行に際しては、公益財団法人 まちづくり振興機構に多大なるご協力をいただいた。深く感謝申し上げます。
4. 整理作業、報告書の編集は、平成30年度、令和元年度に姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが実施した。調査及び整理の体制は下記のとおりである。

姫路市教育委員会 令和元年度現在 ()内は、調査開始から平成30年度までに在籍した職員

教 育 長 松田克彦 (中杉隆夫)
教育次長 坂田基秀 (八木優、林尚秀、名村哲哉)
生涯学習部
部 長 沖塩宏明 (植原正則、小林直樹、岡田俊勝)

文化財課
課 長 花幡和宏 (福永明彦)
課長補佐 大谷輝彦
技術主任 関梓(第18次調査・整理担当)

埋蔵文化財センター
館 長 前田光則 (秋枝芳)

課長補佐 岡崎政俊
係 長 森恒裕
主 事 (岡本武平、小林啓佑)
再 任 用 竹井宏文、山下哲司
技術主任 小柴治子(第14次調査・整理担当)、中川猛、福井優、南憲和
技 師 黒田祐介
技 師 補 山下大輝

5. 遺物実測図作成及びトレースは株式会社イビソク、遺構実測図トレース及び版下作成は、株式会社アコードに委託した。空中写真測量図作成は、株式会社仲栄開発株式会社委託した。
6. 本報告に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターが保管している。
7. 発掘調査・出土品整理及び報告書の作成にあたっては、地元自治会より御協力を賜った。また、古墳時代中期の土器については、青柳泰介氏、笹栗拓氏、中野咲氏にご教示を賜った。深く感謝の意を表したい。(名称五十音順)

一 凡 例

1. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海面(T.P.)を基準とした。
2. 土層名は、農林水産省農林水産技術会事務局・「新版標準土色帳」(1999年度版)に準拠した。
3. 本報告書で使用した遺構番号は、遺構種ごとに付けた。各遺構種の表記は、文化庁文化財部記念物課監修の「発掘調査のてびき」記載の略号を使用した。
4. 文章中の引用文献は、[文献(参考文献番号)]と記載する。
5. 各時代の時期区分・遺物の記述については、下記の編年案を参考とした。文章中で時期にふれる場合は、文献番号の後に続く()内のとおり記述し、各編年案で設定された時期との併行関係を想定している。
弥生時代:長友朋子・田中元浩「西播磨地域の土器編年」[弥生土器集成と編年―播磨編―][文献(18)](〇期)
古墳時代:田辺昭三他「陶邑古窯址群Ⅰ」[文献(10)](陶邑〇〇型式)
注美紀「古墳時代中期・後期の土師器に関する一考察」[国家形成期の考古学][文献(13)](〇段階)
平安時代以降:中川猛「村東遺跡 - 姫路市英賀保駅周辺土地画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ - 」[文献(40)](〇期)
6. 版の記述は、[文献(6)]・[文献(8)]を参考とした。
7. 弥生時代の竪穴建物跡の建物内付属施設の名称及び定義は、[文献(9)]を参考とした。

目次

序 / 例言 / 凡例 / 目次

第1章 調査に至る経緯と遺跡の概要

第1節 調査に至る経緯と調査地の位置	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査地の位置と周辺の遺跡	1
第2節 遺跡の概要	1
1. 調査の概要	1
2. 兵庫県教育委員会の調査	1
3. 姫路市教育委員会の調査	2

第2章 調査の成果

第1節 第14次調査	3
1. 基本厨序	3
2. 調査の概要	3
3. 竪穴建物跡	3
4. 土坑	4
5. 溝	4
6. 柱穴	5
第2節 第18次調査	5
1. 基本厨序	6
2. 調査の概要	6
3. 竪穴建物跡	6
4. 土坑	8
5. 溝	9
6. 雁立建物跡	10

第3章 総括

第1節 時期ごとの調査成果	11
1. 弥生時代	11
2. 古墳時代	11
3. 平安時代後期以降	12
第2節 まとめにかえて	13
1. 遺構の分布と立地	13
2. 遺構の規模と構造	13
3. 出土遺物	13

一 図版目次

図版1 図1 調査の位置と周辺の遺跡 S=1-5,000	図版16 図29 第18次 S81 S=1-50
図版2 図2 市之郷遺跡の概況調査箇所位置図 S=1-5,000	図版17 図30 第14次 出土遺物実測図1 S=1-4
図版3 図3 古墳時代の遺跡分布 S=1-5,000	図版18 図31 第14次 出土遺物実測図2 S=1-4
図版4 図4 市之郷遺跡東部 時期別土遺跡分布図 S=1-1,000	図版19 図32 第14次 出土遺物実測図3 S=1-4
図版5 図5 第14次 全体図 S=1-100	図版20 図33 第18次 出土遺物実測図4 S=1-4(94.95,104-S=1.1)
図版6 図6 第14次 S1 S=1-50	図版21 図34 第18次 出土遺物実測図5 S=1-4(127-S=1.1)
図版7 図7 第14次 S2 S=1-50 図8 第14次 S2 断面図 S=1-50	図版22 図35 第18次 出土遺物実測図6 S=1-4(128-132-S=1.1)
図版8 図9 第14次 S24 断面図 S=1-50 図10 第14次 S26 断面図 S=1-50	図版23 図36 第18次 出土遺物実測図7 S=1-4(186-S=1.1)
図版9 図11 第18次 全体図 S=1-100	図版24 図37 第18次 出土遺物実測図8 S=1-4(223-S=1.1)
図版10 図12 第18次 南東断面図 S=1-100 図13 第18次 西側断面図 S=1-100	図版25 表1 第14次 出土遺物実測表1
図版11 図14 第18次 S1 S=1-50	図版26 表2 第14次 出土遺物実測表2
図版12 図15 第18次 S2 S=1-50	図版27 表3 第18次 出土遺物実測表1
図版13 図16 第18次 S3 S=1-50	図版28 表4 第18次 出土遺物実測表2
図版14 図17 第18次 S4 S=1-50 図18 第18次 S6 S=1-50	図版29 表5 第18次 出土遺物実測表3
図版15 図18 第18次 S5 S=1-50 図19 第18次 S5 土柱穴のまど S=1-25	
図版16 図19 第18次 S7 S=1-50	
図版17 図20 第18次 SK1断面図 S=1-50 図21 第18次 SK2断面図 S=1-50	
図版18 図21 第18次 SK3断面図 S=1-50 図22 第18次 SK5 S=1-25	
図版19 図22 第18次 SK1断面図 S=1-50 図23 第18次 SK2断面図 S=1-50	
図版20 図23 第18次 SK3断面図 S=1-50 図24 第18次 SK5 S=1-25	
図版21 図24 第18次 SK1断面図 S=1-50 図25 第18次 SK2断面図 S=1-50	
図版22 図25 第18次 SK3断面図 S=1-50 図26 第18次 SK5 S=1-25	

一 写真図版目次

写真図版1 写真1 調査地遺跡(北から) 写真2 調査地遺跡(南から) ※写真1,24何県土地区画整理事業に伴う発掘調査で撮影した
写真図版2 写真3 第14次 調査区全貌(西から)
写真図版3 写真4 第14次 S1(西から) 写真5 第14次 S1(調査区北側断面(南東から))
写真図版4 写真6 第14次 S1 調査区南側断面(北西から) 写真7 第14次 S1(北1号土坑(南から)) 写真8 第14次 S1(北2号土坑(東から))
写真図版5 写真9 第14次 S1(北3号土坑(西から)) 写真10 第14次 S1(北5号土坑(北から))
写真図版6 写真11 第14次 S2(北から) 写真12 第14次 S2(断面(北内から))
写真13 第14次 S24(北から) 写真14 第14次 S22(北から) 写真15 第14次 SD1付添調査区北側断面(南西から)
写真図版7 写真16 第14次 SD2断面(南東から) 写真17 第14次 SD7, SD8(北から)
写真図版8 写真18 第18次 調査区近景(東から)
写真図版9 写真19 第18次 調査区近景(西から)
写真20 第18次 調査区全貌(上から)
写真21 第18次 S1(東から) 写真22 第18次 S2(南から) 写真23 第18次 S2(北から)
写真24 第18次 S3(東から) 写真25 第18次 S3(北から) 写真26 第18次 S3(南から) 写真27 第18次 S3(断面(東から))
写真28 第18次 S3(断面(北から)) 写真29 第18次 S3(断面(南から))
写真図版10 写真30 第18次 S3(断面(東から)) 写真31 第18次 S3(断面(北から)) 写真32 第18次 S3(断面(南から))
写真33 第18次 S3(断面(東から)) 写真34 第18次 S3(断面(北から)) 写真35 第18次 S3(断面(南から))
写真図版11 写真36 第18次 S5(東から) 写真37 第18次 S5(南から) 写真38 第18次 S7(南から) 写真39 第18次 S7(断面(西から))
写真図版12 写真40 第18次 SK1断面(南から) 写真41 第18次 SK2断面(北から) 写真42 第18次 SK3断面(北から)
写真43 第18次 SK5(南東から) 写真44 第18次 SD1断面(南から) 写真45 第18次 SD2断面(北から) 写真46 第18次 SD2(南から)
写真図版13 写真47 第18次 SD5(南から) 写真48 第18次 SD5(断面(南から))
写真49 第18次 SP9断面(北から) 写真50 第18次 SP10断面(南から) 写真51 第18次 SP11断面(南から) 写真52 第18次 SP13断面(南から)
写真53 第18次 S1(西から)
写真図版14 写真54 第14次 出土遺物1
写真図版15 写真55 第14次 出土遺物2
写真図版16 写真56 第14次 出土遺物3
写真図版17 写真57 第18次 出土遺物1
写真図版18 写真58 第18次 出土遺物2

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と調査地の位置

1. 調査に至る経緯

姫路市市之郷において、高齢者向け住宅整備・運営事業が計画された。当該地はJR東経路駅に北接する区画で、市之郷遺跡(県道番号020462)の範囲内にあった(図1)。また、兵庫県教育委員会がJR陽本線等連続立体交差事業に先立ち実施した兵庫県第1次発掘調査における、E-3～5区の北側(位置)、県営姫路日出住宅の建設に先立つ兵庫県第3次発掘調査箇所及び、平成27年(2015年)に実施した姫路市第13次調査箇所、平成28年(2016年)に実施した姫路市第16次調査箇所の南側に位置する。これらの既往調査により、当該地は弥生時代～古墳時代を中心とする遺構の存在が判明していた。

このことから、平成27年度に敷地内を縦断する水路の付替え工事に伴い、本発掘調査(第14次調査・調査番号:20150403)を実施した。調査面積は132㎡、調査期間は平成27年(2015年)12月9日から平成28年(2016年)1月9日である。その後、平成29年度に高齢者向け集合住宅建設工事に伴う本発掘調査(第18次調査・調査番号:20170303)を実施した。調査面積は666㎡、調査期間は平成29年(2017年)10月24日から平成30年(2018年)1月24日である(図2)。

2. 調査地の位置と周辺の遺跡

市之郷遺跡は、弥生時代から中世にかけて営まれた集落遺跡である。姫路平野の東部中程、現在の市川下流域西岸に位置する。包蔵地の範囲は、JR東経路駅周辺の姫路市日出町、市之郷、市之郷町、阿保にまたがる東西約1km、南北約350mを測り、遺跡の東端は市川西岸に達し、西端は兵庫県姫路警察署の西側に及び(図1)。遺跡の中央付近に7世紀前半の創建とされる市之郷廃寺(県道番号:020463)がある。

周辺の遺跡としては、南に阿保遺跡第1地点・第2地点が所在する。前者からは初期須恵器や韓式土器が出土しており、近年には縄文土器も出土した。後者では弥生時代の竪穴建物跡や中世の掘立柱建物跡、木棺墓のほか、剣貫式の井戸枠を持つ井戸を検出し、踏脚礎や石帯等の奈良時代から平安時代の官衙に関連するとみられる遺物も出土している。その他、約1km西方には播磨国府推定地である本町遺跡やその関連施設とされる豆腐町遺跡が所在する。市川東岸には市内最大の前方後円墳である国指定史跡壇場山古墳や豊富な渡来系副葬品が国指定重要文化財となっている宮山古墳をはじめ、古墳時代中期から後期を中心とする多くの古墳が築造されている。

第2節 遺跡の概要

1. 既往調査の概要

当該地周辺は、戦前から遺物の採掘や塔心礎の存在などが知られ、研究者の注目を集めてきた。昭和16年(1941年)には姫路貨物駅跡車場拡張工事によって多くの弥生土器が出土し、今里幾次氏によって報告されている[文獻(1)]。昭和45年(1970年)には、鎌木義昌氏により山陽新幹線建設に伴う事前調査が実施された。この調査は、調査地点等の詳細は不明であるものの、弥生時代中期の竪穴建物跡や奈良時代の掘立柱建物跡が検出された[文獻(2)]。近年は、姫路駅周辺の山陽本線等連続立体交差事業と、それに伴い発生した用地を活用した都市計画「キャストI」21計画のサブエリア(生活利便ゾーン、健康福祉・住宅ゾーン)及び、姫路駅周辺土地画整理事業地にも該当していることから、兵庫県姫路警察署もものづくり大学校、すこやかセンターなどの施設、大日親などの道路整備等の再開発事業に伴い、平成6年から遺跡の本格的な調査が開始された。令和元年度までに姫路市では18次、兵庫県では5回にわたる本発掘調査がおこなわれている。なお、姫路市による試掘・確認調査に基づき、当初の遺跡名は「仮称 姫路駅周辺第3地点遺跡」であったが、平成22年(2010年)5月26日をもって「市之郷遺跡」に変更された。

今回報告する姫路市第14次・第18次調査と特に関連するのは、兵庫県第1次調査、第5次調査および、姫路市第13次、第16次調査である(図2)。これらの調査でも、同じく5世紀から6世紀の竪穴建物跡を検出し、渡来系集団の集落地の北側への広がりを確認した。以下に兵庫県及び姫路市が実施した既往調査の概要を述べる。

2. 兵庫県教育委員会の調査

第1次調査 JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査である。弥生時代から中世の遺構を検出した。なかでも、最も東端の調査区であるE区において遺付のかまどを持つ竪穴建物跡から初期須恵器と韓式土器が出土したことで渡来系集落の存在が明らかとなった。また、調査区西部が市之郷廃寺の想定地に当たり、東西方向の溝から瓦が大量に出土したことから、市之郷廃寺の寺域を区画する遺構の可能性が想定され、寺の実態解明の糸口となった。

第2次調査 都市計画道路大日親緊急街路整備工事に伴う発掘調査である。弥生時代前期から中期の集落跡を確認し、前期の土坑から炭化米がまとまって出土した。

第3次調査 県営姫路日出住宅建替に伴う発掘調査である。弥生時代中期から後期、古墳時代前期、後期の竪穴建物跡と掘立柱建物跡を中心とする遺構を検出した。中でも、古墳時代前期(布留式併行期)の大型の掘立柱建物跡と、古墳時代後期の竪穴建物跡群から掘立柱建物跡群への推移の状況を確認した。

第4次調査 姫路警察署庁舎新築事業に伴う発掘調査である。弥生時代、古墳時代、中世の遺構を検出した。なかでも、古墳時代の遺構は、6世紀後半から7世紀中期にかけての竪穴建物跡と掘立柱建物跡群を検出し、7世紀前半の掘立柱建物群は、調査区の東に近接して所在する市之郷廃寺建立に関わった氏寺建立氏族の居宅跡であると推測されている。

第5次調査 ものづくり大学校整備事業に伴う発掘調査である。弥生時代前期の土坑、中期の竪穴建物跡、土坑、溝、古墳時代の竪穴建物跡、溝、土坑、中世の掘立柱建物跡、墓、井戸、梵鐘の铸造遺構及び、市之郷廃寺の寺域の中心部を検出した。古墳時代の竪穴建物跡は、27棟のうち4棟から韓式土器が出土し、溝や土坑から鉄釘が出土している。市之郷廃寺関連の遺構は、初めて中心伽藍を検出し、金堂と考えられる基壇跡、聖地跡を確認し、湯尾、道具瓦を含む大量の瓦と共に水煙の一部が出土したことから、塔跡の存在が想定されている。

3. 姫路市教育委員会の調査

- 第1次～** 姫路駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査である。平成6年度から平成9年度に実施した。
- 第3次調査** 都市計画道路大日線より西側の調査区では、弥生時代中期から古墳時代初期の溝、竪穴建物跡、土坑、掘立柱建物跡などが確認されている。また、奈良時代の祭祀に関連するとみられる遺構を検出した。東部調査区では、古墳時代の竪穴建物跡、溝、土坑、市之郷廃寺に関連するとみられる瓦、鵜尾が出土している。
- 第4次調査** キャスタP2住宅建設に伴う発掘調査である。弥生時代の流路、平安時代後期以降の掘立柱建物跡5棟などを検出し、これらの遺構を検出した土層から、突帯土器が出土している。
- 第5次調査** 新福祉センター建設に伴う発掘調査である。弥生時代から中世の遺構を確認した。調査区中央で旧河道を検出し、弥生時代から古代の遺構はそれを避けるように東西の微高地から検出された。このうち、調査区東部で検出した南北方向の溝は、周辺の兵庫県教育委員会の調査成果と合わせて市之郷廃寺の寺域の西限を区画する溝の一部と評価されており、この溝の東西に隣接して同時期の掘立柱建物跡が検出されている。中世の遺構としては、13世紀頃の底に木枠を据えた土組み井戸、木棺墓、大葬墓と見られる土坑墓などを確認した。
- 第6次調査** 店舗建設に伴う発掘調査である。弥生時代中期の溝、古墳時代後期末から奈良時代の東西方向の溝、土坑、平安時代の遺構を検出した。溝は市之郷廃寺に関連する遺構とみられ、埋土から炭灰や磁片等が出土している。
- 第7次調査** すこやかセンター(旧名:新福祉センター)全天候型福祉スポーツ施設建設に伴う発掘調査である。弥生時代中期以前の流路、古墳時代の遺構など付の竪穴建物跡、市之郷廃寺に関連する可能性がある掘立柱建物跡、溝などを検出した。
- 第8次調査** 店舗建設に伴う発掘調査である。調査範囲の大部分は旧河道にあたり、古代以前の遺構は確認できなかった。調査区南西隅で、旧河道の東岸を検出し、それより南東側でわずかに弥生時代前期、中期の土坑や溝を検出した。
- 第9次～** 阿保土地区画整理事業地内における、都市計画道路大日線整備に伴う発掘調査である。中世の柱穴を多数検出し、土坑墓なども確認した。
- 第10次調査**
- 第11次調査** JR東姫路駅前広場整備に伴う発掘調査である。古墳時代の土坑、奈良時代の溝、土坑、中世の掘立柱建物跡、柱穴、土坑を確認した。
- 第12次調査** JR東姫路駅舎建設に伴う発掘調査である。弥生時代の溝、平安時代のピットを確認した。姫路市埋蔵文化財センター報告書第34集として報告書が発刊されている。
- 第13次調査** 市道城東146号線拡幅工事に伴う発掘調査である。古墳時代から中世の遺構を検出した。特に古墳時代中期の比較的限られた時期での継続した遺構の分布が把握でき、市之郷遺跡における集落域の推移と渡来系文化の受容と浸透過程を考える上での資料が増加した。
- 第14次調査** 本報告書の調査
- 第15次調査** 市道146号線(南北方向拡張)に伴う発掘調査である。ピットを検出したが、中世以前の明確な遺構は確認できず、遺跡の縁辺部にあたると思われる。
- 第16次調査** 店舗建設に伴う発掘調査である。弥生時代の竪穴建物跡、土坑、溝、方形周溝墓、古墳時代の竪穴建物跡、土坑、溝、掘立柱建物跡、柱穴、中世の土坑、溝、柱穴等を検出した。当該地は、第13次調査と同じく兵庫県教育委員会による第1次調査で古墳時代中期の竪穴建物跡をまとめて確認したB地点の北側にあたり、渡来系集落の分布について新たな情報が追加された。姫路市埋蔵文化財センター報告書第59集として報告書が発刊されている。
- 第17次調査** 集合住宅建設に伴う発掘調査である。弥生時代の溝、竪穴建物跡、古墳時代の竪穴建物跡、中世の溝、土坑、掘立柱建物跡を検出した。姫路市埋蔵文化財センター報告書第60集として報告書が発刊されている。
- 第18次調査** 本報告書の調査

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 第14次調査

1. 基本層序

現地表面から盛土(図5-1層)、旧耕土(図5-2層)、床土(図5-3層)、中世の遺物を含む約5～15cmの灰色砂質土(図5-4層)、部分的に検出した4層に6層が混じる灰色砂質土(図5-5層)、奈良時代の遺物を含む約5～20cmの黒褐色土層(図5-6層)を経た現地地表下約2mで遺構検出面である黄灰色砂礫層または黄灰色砂混じり粘質土層を確認した(図5-a～d層)。検出レベルは、T.P118～119mである。砂礫層は南西に向って低くなり、黄灰色砂混じり粘質土層の下に埋没していた。

2. 調査の概要

検出した遺構は、竪穴建物跡、土坑、旧河道を含む溝、柱穴である。以下、遺構の種類ごとに詳細を述べる。なお、詳細図がある遺構は、図もしくは図版番号を示すが、それ以外の遺構はすべて図5に掲載している。(図5の北壁断面図の土層注記については、土層番号のみを記す。)

3. 竪穴建物跡

2棟を検出した。

S11(図6、写真4～10)

検出状況 調査区西部でSD4の上層から検出した。東西辺を検出したのみで南北辺はともに調査区外である。

形状・規模 検出部の規模は東西約6.3m、南北3mで、南北壁共に調査区外であるが、平面プランは方形と考えられる。深さは0.65mを測る。床面の標高は11.2mである。主軸は、N-5-Eをとる。

埋没状況 埋土は黄灰色砂混じりシルトで、断面の状況から、上層は自然堆積により徐々に埋没したと考えられ、調査時はSD5とし

て遺物を取上げた(14-1層-図6 7-1層)。下層はブロック状の埋土が多く混じることから床面より上層については人為的に埋戻したものと推測される(7-2～7-4層-7-6層)。

付属施設	かまど、主柱穴、周溝を検出した。
かまど	建物床面の南東部で検出した。突口の一部を検出したのみで、大部分は調査区外であることから、平面形状は不明である。調査区内ではかまど周辺に東西2.5m、南北0.8mの範囲で炭が堆積し、床面も硬く焼け締まっていた。調査区南壁の断面観察によると、かまど外壁の基底部分が最大で厚さ0.25m、高さ0.18m分残存し、内面は被熱して赤く変色していた。かまど内部の幅は0.4mを測る。
主柱穴	4基を検出した。掘方の直径は0.35～0.6m、深さ0.15～0.5mを測る。断面観察でも柱痕跡は確認できず、再利用等のため抜き取った可能性も考えられる。
周溝	東西の壁面に沿って検出した。東壁沿いの周溝は、幅0.8m、深さ0.15m、西壁沿いは幅1.0m深さ0.2mを測る。
出土遺物	須恵器有蓋高杯、杯身、蓋、短頸壺、土師器瓶、甕、高杯や製塩土器などが出土した(図30-31-32-1～50)。須恵器有蓋高杯は、脚部の透かしが3方(図30-11・13・図32-47)と4方(図30-12)の個体が混在する。土師器瓶(図31-29)は平底で、蒸気孔は多孔タイプである。中央孔の周りに1重の周開孔が廻る。周開孔の形状は楕円で、ほぼ等間隔に5ヶ所配置されている。製塩土器(32)は、器壁が2mm以下と薄く、手づくねで内外面ともナデ調整のみである。山本分類例ではⅡ式b類) [文献(24)]・「葦原北遺跡I」ではA-x-1類もしくはA-y-1類 [文献(29)]にあたる。ほとんどが細かく破砕した形状で、炭片を多く含む埋土に混じって出土し、特に西壁沿いの周溝付近に集中していた。破片の総重量は322gである。
時期	出土遺物から、古墳時代中期(陶器TK208～TK47型式)の時期が推測される。
SI2(図7、写真11、12)	
検出状況	調査区中央付近でSD4の上層から検出した。
形状・規模	南側が調査区外に延びるため規模は不明であるが、東西4.7m、南北3m分を検出し、平面形は隅丸方形と推測される。床面までの深さは0.45mを測る。床面の標高は11.2mである。主軸は、N-5°-Eをとる。
埋没状況	埋土は、黄灰色砂少量混じりシルトである。埋土の堆積状況と壁面の形状が若干崩れていることから、自然堆積により埋没したと考えられる。
付属施設	主柱穴、燃焼施設、高床部を検出した。
主柱穴	中央部床面の北辺中央北端から1基を検出した。掘方の直径0.5m、深さ0.3mを測る。柱痕跡は確認できなかった。
燃焼施設	10型中央型土坑である。1土坑は長径0.6m、短径0.4m、深さ0.05mの楕円形を呈し、底面から炭を検出した。0土坑は、直径0.45m、深さ0.1mの円形と見られるが、南は調査区外に延びているため全体の規模、形状は不明である。
高床部	南は調査区外に延びているため不明であるが、建物跡の壁面に沿って検出した。幅1.0m、中央床面との高低差は約0.05mを測る。
出土遺物	高杯の脚部、長頸壺の頸部、器台の口縁部等が出土した(図32-51～61)。埋土上層で出土した土師器壺(図32-62)は、古墳時代の遺物である。
時期	上層埋土から古墳時代中期とみられる土師器が出土したが、床面付近の出土遺物と付属施設から、弥生時代後期(V期)の遺構と判断した。

4. 土坑

	4基を検出した。
SK1(図5)	
検出状況	調査区東端で検出した。
形状・規模	東西3.0m、南北は最大1.3mを検出したが、北側が調査区外に延び、南側は攪乱を受けていることから、全体の規模は不明である。深さは0.2mを測る。
埋没状況	埋土は7層で、4層の下位に堆積していた。埋土が均質であるなど断面の状況から、自然堆積により徐々に埋没したと考えられる。
出土遺物	底部余切りの土師器皿の破片が出土した。
時期	遺物が破片であることから、詳細な時期は不明であるが、11世紀後半～12世紀前半頃の平安時代後期(Ⅲ期)の時期が考えられる。
SK2(図5)	
検出状況	調査区東端で検出した。
形状・規模	東西0.4m、南北0.85mの不整形な長楕円形を呈する。
埋没状況	埋土は4層に近似する。
出土遺物	須恵器、土師器の破片が出土したが、器種等は不明である。
時期	遺構の埋土から、SK1より下の時期が考えられるが、詳細は不明である。
SK3(図5)	
検出状況	調査区東部でSD6の上層から検出した。
形状・規模	細長い溝状で、断面は浅いU字形を呈し、長さ1.5m、幅0.45m(調査区北壁断面では、最大幅0.65m)、深さ0.2mを測る。主軸は、N-20°-Eをとる。
埋没状況	埋土は上層が5層、下層が6層である。
出土遺物	須恵器、土師器の破片が出土したが、器種等は不明である。
時期	下層の埋土が6層であることから、奈良時代以降の時期が考えられるが、詳細は不明である。

SK4 (図5)**検出状況** 調査区中央付近でSD2の上層から検出した。**形状・規模** 検出部は東西2.0m、南北1.5mを測り、不整形な楕円を指向するが、北側が調査区外に延びることから全体の形状、規模は不明である。断面は浅いU字形で深さ0.25mを測る。**埋没状況** 埋土は6層である。**出土遺物** 須恵器、土師器の細片が出土したが、器種等は不明である。**時期** 埋土が6層であることから、奈良時代以降の時期が考えられるが、詳細は不明である。**5. 溝**

8条を検出した。

SD1 (図5、写真13、15)**検出状況** 調査区東部で、SD6の上層から検出した。調査区を横断し、南北にはほぼ直線的に延びる。**形状・規模** 断面は浅いU字形を呈し、検出部の長さ3.4m、最大幅0.65m、深さ0.15mを測る。主軸は、N-22°-Wをとる。**埋没状況** 埋土は6層である。**出土遺物** 須恵器などの細片が出土した。**時期** 埋土が6層であることから奈良時代以降の時期が考えられるが、出土遺物が少なく、詳細は不明である。**SD2 (図8、写真14)****検出状況** 調査区中央付近で検出し、SD6、SI2を切る。北東から南西にやや湾曲しながら調査区を横断する。**形状・規模** 断面は不整形な浅いU字形を呈し、検出部の長さ4.5m最大幅1.1m、深さ0.2mを測り、南北とも調査区外に延びる。主軸は、N-52°-E前後である。**埋没状況** 埋土は黒褐色砂混じりシルト(11層、図8-1層)で、南側では下層に灰黄色シルト混じり粗砂～砂層が堆積していた(図8-2層)。**出土遺物** 須恵器などの細片が出土した。**時期** 出土遺物が少なく、第14次調査の成果からは詳細な時期は判断できない。しかし、埋土の特徴と遺構の切合い、及び既往調査で確認した遺構との位置関係から、第13次調査SD7・第18次調査SD2と同一遺構である可能性が高く、古墳時代後期(陶器TK43型式)の遺構と考えられる。**SD3 (図5)****検出状況** 調査区中央付近で、SI2、SD4の上層で検出した。**形状・規模** 東西-南北-東西方向にかぎ状に屈曲している。検出部の長さ3.7-1.2-2.7m、幅0.2～0.5m、断面は浅いU字形を呈し、深さ0.05～0.2mを測る。主軸は、N-10°-Eをとる。**埋没状況** 埋土は3層に近似していた。**出土遺物** 遺物は出土しなかった。**時期** 埋土が3層に近似することから、鎌倉時代以降の耕作に伴う水路、または耕作痕と考えられる。**SD4 (図9、写真16)****検出状況** 調査区中央西寄り、SI1、SI2の下層から検出した。北西から南東に調査区を横断し、ほぼ直線的に延びる。**形状・規模** 断面はU字形を呈し、検出部の長さ4.5m最大幅4.2m、深さ0.8mを測る。主軸は、N-61°-Wである。**埋没状況** 埋土は暗灰黄色～オリーブ褐色のシルトから砂で、最下層に一部砂礫が堆積する(12、12'、13層・図9-1～3層)。**出土遺物** 最上層の12層上面からは細片ながら弥生時代後期の遺物が出土したが、主に弥生時代中期(IV期)の窓等が出土した。**時期** 最終的に弥生時代後期(V期)の段階で安定したとみられるが、主な埋没時期は弥生時代中期(IV期)と考えられる。**SD5 (図5)****検出状況** SI1の上層で検出した。検出時は南北方向の溝と認識したが、掘削途中で堅穴建物跡の上層に自然堆積した土層であることが判明した。**形状・規模** 断面は浅いわみ状で、深さ0.2mを測る。**埋没状況** 埋土はオリーブ黒色砂混じりシルトである(6-3層・図6-6層)。**出土遺物** 須恵器蓋片が出土した(図32-66～70)。**時期** SI1は古墳時代中期の堅穴建物跡であるが、最終的な埋没段階であるこの層位は、出土遺物から古墳時代後期(陶器TK10～TK209型式)の時期があたえられる。**SD6 (図10)****検出状況** 調査区東部でSD1、柱穴の下層から検出した。東西方向から南北方向に大きく湾曲して調査区を横断する。**形状・規模** 検出部は東西11.5m、南北3.0mを測る。断面は不整形な浅いU字形を呈し、深さ0.4mを測り、南北とも調査区外に延びる。**埋没状況** 埋土は褐灰色砂混じりシルト(8層・図10-1層)である。**出土遺物** 須恵器の細片が出土した。**時期** 古墳時代後期の遺構と考える。しかし、出土遺物が少なく、詳細な時期は不明である。**SD7 (図5、写真17)****検出状況** 調査区東部でSD6の下層から検出した。調査区を横断し、南北にはほぼ直線的に延びる。**形状・規模** 検出部は長さ3.2m、最大幅0.9m、深さ0.2mを測り、断面は浅い逆台形を呈する。主軸は、N-20°-Wで、南北とも調査区外に延びる。**埋没状況** 埋土は褐灰色～黒褐色砂混じりシルト(10層)である。

- 出土遺物** 須恵器の細片が出土した。
時期 出土遺物から、古墳時代後期の遺構と考えられる。
- SD8(図5、写真17)**
検出状況 調査区東部でSD6、SD7の下層から検出した。調査区を縦断し、南北にはほぼ直線的に延びる。
形状・規模 検出部は長さ4.5m、最大幅1.6m、深さ0.15mを測り、断面は浅いU字形を呈する。主軸は、N-50°-Wで、南北とも調査区外に続く。
- 埋没状況** 埋土は暗灰黄色砂混じりシルト(9層)である。
出土遺物 須恵器の細片が出土した。
時期 埋土の特徴と遺構の切合いから、古墳時代の遺構と考える。しかし、出土遺物が少なく、詳細な時期は不明である。

6. 柱穴

69基を検出した。調査区が狭小であることから、同一建物と認識できる柱穴を抽出できなかった。大部分の柱穴は、掘方が直径0.2～0.35mで、平面は円形を志向する。柱痕跡が残るものは直径10～15cmを測る。埋土は、灰色シルトや砂質土(7・17・18層と近似する)である。SP49・SP56は、掘方の規模が0.6mを越え、埋土も褐灰色を呈することから、古墳時代の遺構の可能性はあるが、時期を示す明確な遺物は出土しなかった。以下、報告書に遺物を掲載した遺構のみ個別に記述する。

SP5(図5)

- 検出状況** 調査区東部でSD6の上層から検出した。
形状・規模 掘方は直径0.3mの円形で、柱痕跡は直径0.15mを測る。
埋没状況 埋土は4層に近似する。
出土遺物 底部糸切りの須恵器輪が出土した(図32-74)。
時期 出土遺物から、11世紀後半～12世紀前半頃の平安時代後期(Ⅲ期)と考えられる。

SP6(図5)

- 検出状況** 調査区東部でSD6の上層から検出した。
形状・規模 掘方は長径0.6m、短径0.4mの楕円形である。柱痕跡は確認できなかった。
埋没状況 埋土は4層である。
出土遺物 須恵器蓋のツマミが出土した(図32-71)。
時期 出土遺物は古墳時代の須恵器だが、埋土が5層であることから、奈良時代以降の時期が考えられる。

SP8(図5)

- 検出状況** 調査区東部でSD6の上層から検出した。
形状・規模 掘方は長径0.6m、短径0.4mの楕円形で、柱痕跡は直径0.15mを測る。
埋没状況 埋土は4層に近似する。
出土遺物 土師器皿が出土した(図32-73)。底部はヘラ切り後ナダ調整を施していた。
時期 出土遺物から、11世紀後半～12世紀前半頃の平安時代後期(Ⅲ期)と考えられる。

SP14(図5)

- 検出状況** 調査区東部でSD1・SD6の上層から検出し、SP13に切られる。
形状・規模 掘方は長径0.35m、短径0.25mの楕円形で、柱痕跡は直径0.25mを測る。
埋没状況 埋土は4層に近似する。
出土遺物 土師器甕が出土した(図32-76)。口縁は端部に面を持ち、くの字状に屈曲する。
時期 出土遺物から、11世紀後半～12世紀前半頃の平安時代後期(Ⅲ期)と考えられる。

SP39(図5)

- 検出状況** 調査区東部でSD6の上層から検出した。
形状・規模 掘方は直径0.3mの円形で、柱痕跡は直径0.2mを測る。
埋没状況 埋土は4層に近似する。
出土遺物 底部糸切り平高台の須恵器輪が出土した(図32-75)。
時期 出土遺物から、11世紀後半～12世紀前半頃の平安時代後期(Ⅲ期)と考えられる。

SP59(図5)

- 検出状況** 調査区中央部のSI2付近で検出した。
形状・規模 掘方は直径0.3mの円形である。柱痕跡は確認できなかった。
埋没状況 埋土は4層に近似する。
出土遺物 須恵器杯蓋須恵器、土師器の細片が出土したが、器種等は不明である。
時期 出土遺物は古墳時代中期の須恵器だが、埋土が4層に近似することから、平安時代末～鎌倉時代頃(Ⅳ期)の時期が考えられる。

第2節 第18次調査

1. 基本層序

基本層序は、現地表面から盛土、旧耕土、自然堆積層(5層～9層、12層)を経た標高11.7～11.9mで基盤層である25Y/3細砂層を確認した(a～d層)。

2. 調査の概要

竪穴建物跡、土坑、溝、掘立柱建物跡を検出した。以下、遺構の種類ごとにその詳細を述べる。なお、詳細図がある遺構は、図もしくは図版番号を示すが、それ以外の遺構はすべて図11に掲載している。(図11に掲載する断面図の土層注記については、土層番号のみを記す。)

3. 竪穴建物跡

7棟を検出した。

SI1(図14、写真20)

調査区の北西端に位置する。竪穴建物跡の南東隅部分を検出した。

検出状況 調査区北側で城東146号線部幅工事に伴い実施された第13次調査 SI2と同一遺構であり、調査区内での検出規模は南北2.5m、東西3.0mを測る。遺構全体では、東西6.5m、南北4.5mの方形に復元できる。主軸は、N-43°-Wで、床面の標高は11.6mである。

埋没状況 埋土は、5層に分けられる。第1層10YR4/2灰黄褐色細砂、第2層10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じりシルト、第3層10YR5/3にぶい黄褐色細砂混じりシルト、第4層10YR4/4褐色極細砂混じりシルト～2.5Y5/3黄褐色細砂、周溝埋土は2.5Y5/4黄褐色極細砂で、第13次調査の成果と合わせて、床面は第4層上面と考えられる。

付属施設 調査地内では周溝のみを確認した。ただ、第13次調査では竪穴建物跡の北西端の中央付近で付付けのかまどを確認している。また、主柱穴は上述の調査成果から4基と考えられるが、検出が想定された位置は、既設の埋設管により攪乱を受けていた。

周溝 断面はU字状を呈し、幅0.1m、深さ0.1mを測る。

出土遺物 須恵器杯蓋、土師器壺や製塩土器などが出土した(図33 76～81)。76は須恵器杯蓋である。79～81は土師器壺である。81は壺の把手であり、断面は円形を呈する。77は製塩土器の口縁部である。器壁の厚さが1～2mmと非常に薄く、内外面にナデ調整のみで仕上げ、部分的に指おさえが残る。第14次調査SI1出土例と同じく、山本分類例ではⅡ式B類「産屋北遺跡I」ではA-x-1類もしくはA-y-1類にあたる。

時期 出土遺物から、古墳時代中期後半(兩邑TK208～TK23型式)と考えられる。

SI2(図15、写真22)

調査区西端中央で検出した。

検出状況 平面は円形に近いが、やや不整形で直線的な部分がみられることから多角形(五角形)の可能性もある。西端の一部は調査区外に広がり、また東端も攪乱を受けているが、南北の全長が9.1mを測ることから、建物の規模は直径約6mと推定される。床面の標高は11.25mである。

埋没状況 埋土は概ね3層に分けられる。第1層10YR4/3にぶい黄褐色極細砂、第2層10YR3/3暗褐色極細砂～10YR4/2灰黄褐色極細砂混じりシルト、第3層 10YR4/3にぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。その下層で貼床とみられる第5層10YR5/4にぶい黄褐色極細砂混じりシルトを確認した。

付属施設 中央土坑(SI2SK1)、主柱穴(SI2SP2、SP3、SP10、SP6)、周溝を検出した。

中央土坑 床面の中央で検出した(SI2SK1)。最上層には、南北2.0m、東西1.9m、厚さ0.05m～0.1mの炭化物を多く含む層が堆積しており、その下層で直径1.0m、深さ0.5mの土坑を確認した。埋土は炭化物が薄く互層に堆積していた。遺物は全く出土しなかった。

主柱穴 4基の主柱穴を確認したが、それぞれ的位置関係から本来は5基だったと推測される。SI2-SP2は、直径0.3m、深さ0.3mを測る。SI2-SP3は、直径0.4m、深さ0.48mを測る。SI2-SP10は、直径0.4m、深さ0.32mを測る。SI2-SP6は、直径0.45m、深さ0.15mを測る。埋土はいずれも単一層であった。

周溝 断面はU字状を呈し、幅0.1m、深さ0.1mを測る。

出土遺物 床面から弥生土器の壺や壺、石器の剥片などが出土した(図33 82～95)。82は壺の口縁である。扁平な床面上面にミガキが施される。83～88は壺の口縁部である。内外面にハケ目が残る。85は頸部に断面三角形の貼付突帯を持つ。89～93は壺か壺の底部である。91は外面にミガキを施す。94、95は剥片である。

時期 出土遺物から弥生時代中期(IV期)と考えられる。

SI3(図16、写真23～27)

調査地西部南端に位置する。調査区内では竪穴建物の北半分と、南壁付近の一部を検出した。

検出状況 平面は方形である。調査区内では東西4.2m分を検出したが、西端は攪乱を受けていることから実際の規模は不明である。南北は、南側調査区で南端を確認し、約5mと推測される。主軸はN-25°-Eで、床面の標高は11.3mである。

埋没状況 埋土は大きく3層に分けられる。上層から2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細砂、10YR3/3暗褐色極細砂～細砂、10YR4/3にぶい黄褐色～4/2灰黄褐色細砂から極細砂まじりシルトとなる。消失建物であり、埋土には炭化物が多く含まれ、建物内部の壁面は被熱により部分的に硬化して赤く変色し、床面直上では炭化材が出土した。炭化材は焼土化した土に被覆されており、それを除去すると、垂木材とみられる建物中央に向けて放射状に出土した木材の上に、縦継の方向に規則性がある炭化物を確認した。植物を編んだ屋根の部材であると推測される。また、屋根材の上に多量の焼土化した土を確認したことから、屋根は土を被せた構造になっていた可能性も考えられる。床面は、貼床(第18層)により構築されていた。

付属施設 主柱穴、周溝を確認した。

主柱穴 2基の主柱穴を検出した。SI3-SP1は直径0.25m、深さ0.2m、SI3-SP2は幅方の直径0.2m、深さ0.3mを測り、直径0.1mの柱痕跡が残っていた。

周溝 断面は浅いU字状を呈する。幅0.1m、深さ0.05mを測り、北東隅付近は周溝が一部途切れている。

出土遺物	須恵器の坏蓋、坏身。土師器の甕、鍋、タケキ石などが出土している。(図33-96～103)。96、97は須恵器杯蓋である。98～100は須恵器杯身である。101、102は土師器甕である。103は土師器鍋の体部である。内面は削り、外面はハケム調整で、把手の淵縁直跡が見られる。
時期	須恵器などの出土遺物から、古墳時代中期後半(陶邑TK208～TK23型式)の時期が推測される。
SI4(図17、写真28)	
検出状況	調査区西部北端に位置する。竪穴建物跡の北側部分は調査区外に広がり、南側も後世の擾乱を受けていた。
形状・規模	平面形は方形とみられる。東西4.2m、南北は両端が確認できなかったが、調査区内での規模は2.2mを測る。主軸は、N-10°-Eで、床面の標高は11.2mである。
埋没状況	埋土は6層からなり、第1層25Y6/3にぶい黄褐色細砂、第2層10YR4/3にぶい黄褐色細砂、第3層10YR4/2灰褐色細砂、第4層10YR4/4褐色細砂、第5層10YR4/6褐色細砂、第6層10YR5/3にぶい黄褐色細砂である。周溝埋土は10YR4/4褐色細砂である。
付属施設	かまど(SI4-SK1)と周溝を検出した。柱穴は5基検出しているが、判断根拠が乏しいため、今回の報告では主柱穴とは扱わない。ただ、検出位置からSI4-SP3またはSI4-SP4は主柱穴である可能性が考えられる。
かまど	建物の北壁中央付近で検出した。造付けのかまどである。北側は調査区外に広がり、西側は擾乱をうけている。調査区内での残存規模は、南北0.5m、東西0.4mの隅丸長方形を呈する。埋土には焼土や炭化物が多量に含まれており、調査区北端で支柱石と考えられる石を確認した。
周溝	断面はU字状を呈し、幅0.15m、深さ0.1mを測る。
出土遺物	埋土からは弥生土師器の底部、高坏の脚部が出土している(図34-105、106)。このほか、破片であるため図化できなかったが、外面に縦方向の平行タケキ調整がある韓式軟質土器長胴甕の破片が出土している。
時期	弥生時代後期(V期)の遺物が目立つが、韓式軟質土器が出土したことから、古墳時代中期の遺構であると判断した。
SI5(図19、20、写真29～35)	
検出状況	調査区中央、南部に位置する。SD5の上層で検出した。
形状・規模	平面形は、方形である。今回の調査で検出した竪穴建物跡の中で規模が一番小さく、南北3.1m、東西3.4mを測る。主軸はN-30°-Wで、床面の標高は11.3mである。
埋没状況	埋土は6層に分かれ、第1層10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じりシルト、第2層25Y4/4オリーブ褐色細砂、第3層25Y4/2暗灰褐色細砂混じりシルト、第4層25Y4/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色細砂混じりシルト、第5層10YR4/2灰褐色細砂混じりシルト、第6層10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じりシルト(焼土塊含む)である。断面の状況から、自然堆積により徐々に埋没したと考えられる。
付属施設	かまど、主柱穴、周溝を検出した。
かまど	竪穴建物跡の北東に位置し、長軸1.0m、短軸0.4mを測る。かまど外壁の基礎部が最大で厚さ0.15m、高さ0.2m残存し、内面は焼然して赤く変色し硬化していた。また、かまど中央には支柱石が据えられおり、その上部に土師器の高坏(図34-109)が置いかぶさるような状態で出土した。かまどの内部からはこのほかにも土師器の甕の破片などがまとまって出土した(図34-108、110、111)。
主柱穴	4基を検出した。SI5-SP1は直径0.3m、深さ0.2mを測る。SI5-SP2は直径0.4m、深さ0.5mを測る。SI5-SP3は直径0.25m、深さ0.2mを測る。SI5-SP4は直径0.2m、深さ0.2mを測る。埋土は単一層であった。
周溝	断面はU字状を呈し、幅0.05m、深さ0.1mを測る。竪穴建物西は周溝が検出されなかった。
出土遺物	土師器の甕や甕、高坏、韓式軟質土器平底鉢が出土した(図34-107～112)。107、112は竪穴建物跡の床面から出土した。107は直口甕で、完形に近い状態で出土した。112は土師器甕で、破片がまとまって出土した。108～111はかまどの内部から出土した。108は甕の口縁部、109は高坏の杯部である。110は韓式軟質土器の平底鉢で外面に格子目タケキを施す。111は甕の体部である。113～117は土層確認のための断面を実施した際の出土遺物である。いずれも弥生時代中期(IV期)の甕、甕である。SI5は弥生時代中期の溝であるSD5の埋没後に構築されており、これらは本来SD5に属する遺物と考えられる。
時期	須恵器は出土していないが、土師器から古墳時代中期(Ⅱ～Ⅲ期陶邑ON231～TK73型式)の時期が推測される。
SI6(図18、写真36)	
検出状況	調査区中央北端で検出した。第13次調査で確認した竪穴建物跡SI1の南端部分に該当する。大部分が後世の擾乱を受けていた。
形状・規模	平面形は、方形である。今回の調査で検出した竪穴建物跡の中で規模が一番小さく、南北3.1m、東西3.4mを測る。主軸はN-30°-Wで、床面の標高は11.3mである。
埋没状況	埋土は10YR4/2灰褐色細砂混じりシルト(焼土塊、炭化物を多く含む)である。床面直上で炭化物を検出した。第13次調査では、保存状態が良好な炭化材が出土している。
付属施設	主柱穴、周溝を検出した。このほか、第13次調査では竪穴建物跡の北東隅付近で造付けのかまどを確認している。
主柱穴	1基を検出した(SI6-SP1)。直径0.25m、深さ0.1mを測る。第13次調査の調査成果と合わせて、主柱穴は全部で4基と考えられる。
周溝	断面はU字状を呈し、幅0.1m、深さ0.1mを測る。
出土遺物	埋土から、弥生土師器の甕、土師器の把手が出土している(図34-118～121)。118は土師器の鍋、または瓶の把手である。厚みのある舌状で、断面は楕円形を呈する。119～121は弥生時代の甕及び甕の底部である。
時期	時期が判断できる遺物がほとんど出土しなかったが、第13次調査成果から、古墳時代中期後半(陶邑TK216～TK208型式)

の時期が推測される。

SI7 (図21、写真39)

- 検出状況** 調査区東部中央に位置する。建物の北東隅はSD21に切られていた。
- 形状・規模** 平面は長方形で、南北5.5m、東西5.0mを測る。主軸は、N-30°Eで、床面の標高は11.7mである。
- 埋没状況** 埋土は25Y4/2暗灰黄色極細砂混じりシルトである。
- 付属施設** 周溝を検出した。柱穴は4基検出しているが、判断根拠が乏しいため、今回の報告では主柱穴とは扱わない。ただ、検出位置からSI7-SP3とSI7-SP4は主柱穴である可能性が考えられる。かまども明確な痕跡がみられず、複視による肩平箇所も多いため確証に欠けるが、北壁中央付近の遺物が集中する付近の可能性があると考えられる。
- 周溝** 断面はU字状を呈し、幅0.1m、深さ0.05mを測る。
- 出土遺物** 埋土から須恵器杯身、土師器甕、石鏝などが出土している(図34 122～127)。122、123は須恵器杯身である。124～126は土師器甕である。石鏝は弥生時代のものである。
- 時期** 須恵器などの出土遺物から、古墳時代中期後半(陶器TK23～TK47型式)の時期が推測される。

4. 土坑

10基検出した。

SK1 (図22、写真40)

- 検出状況** 調査区西端、SI2の上層に位置する。
- 形状・規模** やや方形に近い円形を呈する。長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。
- 埋没状況** 埋土は25Y4/2暗灰黄色細砂である。断面の状況から、自然堆積により徐々に埋没したと考えられる。
- 出土遺物** 出土遺物はなかった。
- 時期** 遺物は出土していないため、時期の特定はできないが埋土の色調と土質から概ね平安時代後期以降の時期が推測される。

SK2 (図23、写真41)

- 検出状況** 調査区中央、SI3の東側に位置する。
- 形状・規模** 南北にやや長い楕円形を呈する。長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.5mを測る。
- 埋没状況** 埋土は2層からなり上層は、25Y4/2暗灰黄色細砂混じりシルト、下層は25Y3/3暗オリーブ褐色極細砂混じりシルトである。
- 出土遺物** 石器の剥片が出土した(図35 128～132)今回の調査において剥片がまとまって出土した遺構はこの土坑のみである。
- 時期** 弥生時代の遺構と考えられるが、土器が出土していないため、詳細な時期は不明である。

SK3 (図24、写真42)

- 検出状況** 調査区の南西、SD4の上層に位置する。
- 形状・規模** 土坑の東側は調査区外に広がるため、遺構全体の規模は不明であるが、径0.75m、深さ0.3mの範囲を確認した。
- 埋没状況** 埋土は、10YR4/3こい黄褐色細砂混じりシルトで、こぶし大の円礫が多量に含まれていた。土坑の底には、25Y4/2暗灰黄色シルトが堆積していた。
- 出土遺物** 土師器の甕が出土した(図35-133)。
- 時期** 出土遺物から時期は古墳時代中期の可能性があるが、遺物が小片で出土量も少ないことから、詳細は不明である。

SK4 (図11、写真20)

- 検出状況** 調査区中央、SK2の東側に位置する。
- 形状・規模** 平面は直径0.6mの円形で、深さ0.2mを測る。
- 出土遺物** 出土遺物はなかった。
- 時期** 遺物は出土していないため、時期は不明である。

SK4 (図25、写真43)

- 検出状況** 調査区東部、SI7の南東に位置する。
- 形状・規模** 形は不定形で、長軸2.2m、短軸2.0m、深さ0.3mを測る。
- 埋没状況** 埋土は、10YR4/3純い黄褐色細砂混じりシルトである。
- 出土遺物** 土師器の甕が出土した(図35 134)。134は同一個体と考えられる体部の破片が複数出土したが、接合しなかった。このうちの1点の外面に線刻が施されていたが、破片であり何が描かれているかは不明である。
- 時期** 出土遺物から、古墳時代の遺構の可能性があるが、遺物が小片で出土量も少ないことから詳細は不明である。

SK6 (図11、写真20)

- 検出状況** 調査区中央、SK4の東側に位置する。南側が調査区外に続く。
- 形状・規模** 調査区内での検出規模は東西0.6m、南北0.3mで半円形を呈する。深さ0.16mである。
- 出土遺物** 出土遺物はなかった。
- 時期** 遺物は出土していないため、時期は不明である。

SK7 (図11、写真20)

- 検出状況** 調査区中央、SB1の北側に位置する。南側が複視を受けていた。
- 形状・規模** 調査区内での検出規模は東西0.6m、南北0.5mで半円形を呈する。深さ0.24mである。
- 出土遺物** 出土遺物はなかった。
- 時期** 遺物は出土していないため、時期は不明である。

SK8 (図11、写真20)

- 検出状況** 調査区東部、SK9の北西に位置する。北側と西側は複視を受けている。

形状・規模 隅丸方形を呈する。調査区内での検出規模は、東西1.1m、南北0.45m、深さ0.25mを測る。

出土遺物 出土遺物はなかった。

時期 遺物は出土していないため、時期は不明である。

SK9 (図11、写真20)

検出状況 調査区東部、SI7の北西に位置する。SK10に切られている。

形状・規模 南北方向にやや長い楕円形で、長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.25mを測る。

出土遺物 出土遺物はなかった。

時期 遺物は出土していないため時期は不明であるが、SK10より古い遺構であることは確実である。

SK10 (図11)

検出状況 調査区東側、SI7の北西に位置する。

形状・規模 南北方向にやや長い楕円形で、長軸1.1m、短軸1.0m、深さ0.2mを測る。

埋没状況 埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じりシルトである。

出土遺物 埋土から須恵器杯身が出土した(図35-135)。

時期 出土遺物から古墳時代中期の遺構の可能性があるが、遺物が小片で出土量も少ないことから、詳細は不明である。

5. 溝

4条を検出した。SD3は、調査過程で遺構ではないと認識したことから欠番とした。

SD1 (図26、写真44)

検出状況 調査区西部に位置し、南北方向に直線的に延びる溝である。SD1の中央には、第14次調査の原因となった水路付替工事が実施されるまで利用されていた煉瓦作りの水路が残存していたことから、溝の両端部分のみを確認した。

形状・規模 断面は浅いU字形を呈するとみられ、最大幅3.9m、延長20.5m、深さ0.1mを測る。主軸は、N-15°-Eをとる。

埋没状況 埋土は4層からなり、第1層2.5Y6/3にぶい黄色極細砂、第2層2.5Y5/4黄褐色細砂、第3層は土師器細片含む2.5Y4/2暗灰黄色細砂である。断面の状況から、何度が溝を掘り直している可能性が考えられる。

出土遺物 須恵器轆や土師器の轆や皿などが出土した(図35-136～145)。136～140は須恵器である。底部破片はいずれも浅い糸切りの平高台をもつ。141、143は土師器轆の口縁部である。142、145は土師器蓋の口縁。144は土師器の皿である。

時期 出土遺物から、平安時代後期(Ⅱ期)の時期が推測される。この溝は第13次調査でも検出しており、上層には同位置で江戸時代の遺物を包含する溝と現代まで利用されていた溝が重複している。このことから、平安時代末頃から現代まで継続して利用されてきた可能性が考えられる。

SD2 (図27、写真45、46)

検出状況 調査区東側の位置し、南北方向に直線的に延びる溝である。南側に位置する調査区においてSD2の延長を確認した。

形状・規模 断面は浅いU字形を呈し、最大幅1.0m、延長20m、北で深さ0.25m、南で深さ0.5mを測る。主軸は、N-5°-Wをとる。

埋没状況 埋土は、北側断面では2で第1層2.5Y4/3オリーブ褐色細砂(下層に鉄分沈着)、第2層 2.5Y3/2黒褐色細砂である。南側断面では埋土を8層に分類でき、下層から上層にむかって埋土の粒子が粗くなっていくことが確認できた。このことから自然堆積により徐々に埋没したと考えられる。

出土遺物 須恵器杯蓋や土師器の蓋や壺が出土した(図35-146～151)。146、147は須恵器の杯蓋である。148～150は土師器の蓋もしくは壺の底部である。159は土師器蓋の把手である。断面はやや扁平である。

時期 出土遺物、及び既往調査で確認した遺構との位置関係から、第13次調査SD7・第18次調査SD2と同一遺構である可能性が高く、古墳時代後期(Ⅲ期TK43型式)の遺構と考えられる。

SD4 (図11)

検出状況 調査区西端の位置し、SK3の下層で検出した溝である。東西方向に直線的に延びる。

形状・規模 断面はU字形で、最大幅0.3m、調査区内での長さ0.3m、深さ0.4mを測る。主軸は、N-75°-Wである。

埋没状況 埋土は2.5Y4/2暗灰黄色シルトである。遺構の上層はSK3によって壊されており、下層部分のみを確認した。検出できた部分が狭小であり内容は不明である。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため時期は特定できなかった。

SD5 (図28、写真47～49)

検出状況 調査区中央、SI5の下層に位置し、南北方向に直線的に延びる。北端は近代以降の擾乱を受けていた。

形状・規模 断面は浅いU字形を呈し、最大幅6.5m、延長15m、深さ0.6mを測る。主軸は、N-90°-Eである。

埋没状況 埋土は上層(第1層・第2層) 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂～10YR5/2灰褐色細砂、下層(第3層～第5層) 10YR4/4褐色細砂～2.5Y5/3黄褐色細砂、最下層(第6層・第7層) 2.5Y4/3にぶい黄褐色細砂～10YR4/3細砂に分類できる。埋土の状態などから自然堆積により徐々に埋没した河道であると考えられる。

出土遺物 遺物は、埋没状況で示した上層、下層、最下層に分けて取り上げを行った。上層では主に第2層から弥生土器の壺や蓋が出土した(図35-153～161)。下層からは弥生土器蓋、壺、蓋、分銅形土製品などが出土した(図36-162～176)。176は分銅形土製品である。表面には刺突文が連続して施され、側面にも刺突文が施されている。表面の穿孔は側面の穿孔とつながっており、側面から表面に向けて棒状の工具を用いて穴があげられたと考えられる。最下層からの出土遺物は、基盤

層である砂礫層との間から弥生時代中期の壺や甕、剥片などが出土した(図36 177～186)。

時期 出土遺物から、河道として機能していたのは弥生時代中期(Ⅳ期)頃と考えられる。その後自然堆積によって徐々に埋没し、古墳時代中期には、SI5が造られた。

6. 掘立柱建物跡・柱穴

121基を検出した。建物跡に復元できたのは1棟で、その他は同一建物と認識できる柱穴を抽出できなかった。掘方の規模は0.15～0.6mで、平面は円形を志向する。大部分は掘方が直径0.2～0.4mで、柱痕跡は0.1～0.2m程度である。規模が大きいのには柱痕跡が確認できず、土坑の可能性も考えられる。出土遺物も細片で時期の特定は困難であるが、埋土の色調と土質が平安時代後期以降の遺構と近似していることから、同様の時期が推測される。以下、掘立柱建物跡及び、本報告書に遺物を掲載した柱穴について、詳細を述べる。

SB1(図29、写真50～53)

検出状況 調査区南部中央付近に位置する。SI3の上層で検出した。

形状・規模 南北4m、東西9mを測る。建物の主軸は、N-15°-Eで、柱間は2間×4間分を確認した。北東角は想定位置に柱穴を確認できず、削平されたか、位置はややずれるものの、SP101が建物の柱穴である可能性が考えられる。また、南部のみ1間分拡張する形状の可能性も考えられる。

埋没状況 埋土は掘方が2.5Y5/2暗灰黄色細砂、柱根部分が2.5Y6/2灰黄色細砂混じりシルトである。

柱穴 14基の柱穴で構成される。SB1-SP1は直径0.1m、深さ0.15mを測る。SB1-SP2は直径0.25m、深さ0.2mを測る。SB1-SP3は直径0.25m、深さ0.2mを測る。SB1-SP4は直径0.2m、深さ0.15mを測る。SB1-SP5は上部を攪乱により削平されている。直径0.3m、深さ0.22mを測る。SB1-SP6は直径0.3m、深さ0.35mを測る。SB1-SP7は直径0.3m、深さ0.25mを測る。SB1-SP8は直径0.28m、深さ0.28mを測る。SB1-SP9は直径0.2m、深さ0.25mを測る。SB1-SP10は直径0.3m、深さ0.3mを測る。SB1-SP11は直径0.3m、深さ0.19mを測る。SB1-SP12は直径0.3m、深さ0.2mを測る。SB1-SP13は直径0.3m、深さ0.2mを測る。SB1-SP14は直径0.1m、深さ0.1mを測る。

出土遺物 出土遺物はなかった。

時期 出土遺物がなく、時期の特定はできないが、埋土から平安時代後期以降の可能性が考えられる。

SP2(図11、写真20)

検出状況 調査区西部北側で検出した。

形状・規模 掘方は直径0.2mの円形で、柱痕跡は直径0.1mを測る。

出土遺物 須恵器壺の口縁部が出土した(図37-187)。

時期 出土遺物の時期は奈良時代以前であるが、埋土から平安時代後期以降の可能性が考えられる。

SP3(図11、写真20)

検出状況 調査区西部北側で検出した。

形状・規模 掘方は直径0.25mの円形である。柱痕跡は直径0.1mを測る。

出土遺物 土師器甕の口縁部が出土した。(図37-188)。

時期 出土遺物から、平安時代後期以降とみられるが、遺物が細片のため詳細な時期は不明である。

SP7(図11、写真20)

検出状況 調査区西部北側で検出した。

形状・規模 掘方は長径0.6m、短径0.4mの楕円形で、柱痕跡は直径0.15mを測る。

埋没状況 埋土は4層に近似する。

出土遺物 土師器椀及び須恵器椀の口縁部が出土した(図37-189-190)。

時期 出土遺物から、平安時代後期以降とみられるが、遺物が細片のため詳細な時期は不明である。

SP10(図11、写真20)

検出状況 調査区西部北側で検出した。

形状・規模 掘方は長径0.35m、短径0.25mの楕円形で、柱痕跡は直径0.25mを測る。

埋没状況 埋土は4層に近似する。

出土遺物 須恵器椀の口縁部が出土した(図37-191)。

時期 出土遺物から、平安時代後期以降とみられるが、遺物が細片のため詳細な時期は不明である。

SP11(図11、写真20)

検出状況 調査区西部でSI2の上層から検出した。

形状・規模 掘方は直径0.2mの円形である。柱痕跡は確認できなかった。

出土遺物 弥生土器甕の底部(図37-192)および、底部余切り平高台の須恵器椀が出土した(図37-192)。

時期 出土遺物から、平安時代後期(Ⅲ期)の時期が推測される。

SP102(図11、写真20)

検出状況 調査区中央部南側から検出した。

形状・規模 掘方は直径0.4mの円形で、柱痕跡は直径0.2mを測る。

出土遺物 無蓋高杯の杯部が出土した(図37-194)。

時期 出土遺物は古墳時代中期の須恵器だが、埋土から平安時代後期以降の可能性が考えられる。

第三章 総括

第1節 時期ごとの調査成果

姫路市第14次・第18次調査では、弥生時代から平安時代末頃までの幅広い時代の遺構を検出した。以下、時期ごとに報告内容をまとめる。

1. 弥生時代

堅穴建物跡2棟、土坑1基、溝1条を確認した。当該地における弥生時代の遺構は少ない。

堅穴建物跡は、第14次調査で1基、第18次調査で1基を検出した。第14次SI21は、弥生時代後期(V期)の隅丸方形の堅穴建物跡である。内部構造は、燃焼施設が10型中央土坑で3方以上の壁面に沿って高床部を備える。市内の弥生時代後期の堅穴建物跡としては定型的な構造である。ただ、高床部が3方以上の場合は主柱穴が通常4基以上になるのに対し、2基とみられる点が異なっている。第18次SI21は、弥生時代中期(IV期)の不整形、もしくは五角形の堅穴建物跡である。内部構造は、燃焼施設が単独の中央土坑で高床部はなく、主柱穴は5基で、市内の弥生時代中期の堅穴建物跡としては定型的な規模・構造の一種である。土坑は、第18次SK2からサヌカイトの割片がまわって出土したが、土器が出土しなかったため詳細な時期は不明である。溝は第14次・第18次調査区を縦断する河道を1条検出した(第14次SD4・第18次SD5)。出土遺物から弥生時代中期(IV期)に機能していたとみられる。この河道は第13次調査の調査区南側の断面観察から今回検出した溝の左岸から約20m東、遺構検出面の土質が砂礫土に変化するところまでが当初の川幅であった可能性があり、第13次調査SK7の下層からも弥生時代中期の遺物が出土している。最上面からは弥生時代後期の土器の細片が出土し、第14次SI2と切り合うことから弥生時代後期までには自然堆積により埋没したようであるが、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が増加しないことから、居住場所としてはまだ不安定な環境だったようである。

2. 古墳時代

堅穴建物跡7棟、土坑3基、溝5条を確認した。全て古墳時代中期から後期の遺構である。なかでも、初期須恵器の時期を含む古墳時代中期の堅穴建物跡をまとめて確認したことは本調査の重要な成果である。

当該地における古墳時代の堅穴建物跡は、古墳時代中期の時期に限られる(図3)。平面形は全て方形で、空容が把握できた5棟からは造付けのかまどを検出した。このうち最も古く位置づけられるのは第18次調査S15である。小規模な建物跡で、床面積は10㎡程度である。造付けかまどが良好に残存しており、土師器高坏などが出土した。土師器の形状から陶色TK73型式もしくはそれより若干古い時期の

調査次数	遺構名	種類	堅穴建物跡																						
			形状(型式)	記番号	-5m	-10m	-15m	-20m	-25m	-30m	-35m	-40m	41m(+)	半室	0.8	2.6	4.8	半室	住居内土坑	通行かまど	平炉	鉢	土器	片	
○	第14次	SI21	隅丸方形	1-2																					
●	第18次	SI21	五角形	1-2																					
●	第18次	SI3	不整形	1-2																					
●	第18次	SI18	不整形	1-2																					
●	第18次	SI19	不整形	1-2																					
●	第18次	SI20	不整形	1-2																					
●	第18次	SI22	不整形	1-2																					
●	第18次	SI23	不整形	1-2																					
●	第18次	SI24	不整形	1-2																					
●	第18次	SI25	不整形	1-2																					
●	第18次	SI26	不整形	1-2																					
●	第18次	SI27	不整形	1-2																					
●	第18次	SI28	不整形	1-2																					
●	第18次	SI29	不整形	1-2																					
●	第18次	SI30	不整形	1-2																					
●	第18次	SI31	不整形	1-2																					
●	第18次	SI32	不整形	1-2																					
●	第18次	SI33	不整形	1-2																					
●	第18次	SI34	不整形	1-2																					
●	第18次	SI35	不整形	1-2																					
●	第18次	SI36	不整形	1-2																					
●	第18次	SI37	不整形	1-2																					
●	第18次	SI38	不整形	1-2																					
●	第18次	SI39	不整形	1-2																					
●	第18次	SI40	不整形	1-2																					
●	第18次	SI41	不整形	1-2																					

●: 調査に土壌に土器や土師器、土師器マゼンタを比較するため、一辺の長さを検測中に付近で検出し、その位置から算出した。このため、各検測箇所と異なる距離となる場合がある。

挿表1 市の郷遺跡 古墳時代中期堅穴建物跡一覧

遺構であると考えられるが、須置器は出土しなかった。最も新しい時期の建物跡は、第18次調査SI7である。出土した須置器杯身の形状から陶器TK23～TK47型式との併行関係が考えられる。このほか、第18次SI3は炭化した建築部材が良好に遺存しており、垂木材とみられる建物中央に向けて放射状に出土した木材の上から、繊維の方向に規則性がある炭化物を確認した。植物を編んだ屋根の部材であると推測される。部分的な出土ではあるものの、屋根の構造を推察するための資料が増加した。

特徴的な出土遺物としては、第14次調査SI1、第18次調査SI1 (=第13次調査SI2)から出土した製塩土器が挙げられる。これらは、いずれも手づくねで器壁が薄く、内外面ともナデ調整で仕上げられる。細かく破砕した状態で出土したため復元は困難であるが、いわゆるコップ形の製塩土器で、山本分類例ではII式b類2 [文献24]、「部屋北遺跡I」ではA-x-1類もしくはA-y-1類 [文献29]にあたると考えられる。炭片を多く含む埋土に細かい破片が大量に混じる第14次調査SI1での出土状況は、「部屋北遺跡I」[文献(29)]で報告されている部屋北遺跡Ⅲ期の製塩土器出土状況に類似している。このほか市之郷遺跡では、兵庫第5次調査SH-E01から外面にタキ調整があるコップ形の製塩土器が出土している(山本分類例II式a類 [文献24]、「部屋北遺跡I」 A-x2類もしくはA-y2類 [文献29])。古墳時代中期のコップ形製塩土器は、総路市内では今のところ市之郷遺跡でしか報告されていない。このほか、第14次調査SI1では外面調整が縄文タキの長胴甕が出土した。体部は破片のみで接合はできなかったが、頸部より上までタキが残る。

3. 平安時代以降

土坑6基、溝2条、掘立柱建物跡1棟、柱穴176基を確認した。平安時代から鎌倉時代にかけての時期が考えられるが、出土遺物が皆無もしくは微量であることから詳細な時期の判断が困難な遺構が大半を占める。遺物の時期がわかる遺構は土坑1基、溝1条、柱穴5基で、おおむね11世紀後半～12世紀前半頃の平安時代後期(Ⅲ期)の遺物が出土している。このうち、第18次SI1は、第13次調査でも続きが検出されており、この調査では上層に同位置で江戸時代の遺物を包含する溝と現代まで利用されていた溝を重複して確認している。このことから、平安時代末頃から現代まで継続して利用されてきた水路である可能性が考えられる。掘立柱建物跡及び柱穴についてはほとんどが時期不明であるが、第14次調査の調査区北東断面を観察すると、柱穴はほぼ中世の遺物を包含する自然堆積層である第4層を切って構築されており、埋土も近似していることから、ある程度まとまった時期に構築された可能性が考えられる。出土遺物からは平安時代後期(Ⅲ期)の時期が当てられるが、同時期の遺物が出土した第14次SK1が第4層に切られているのに対し、柱穴は第4層を切ることから、SK1の方が9段階古い時期の遺構と判断できる。このことから、掘立柱建物跡及び柱穴は、出土物より新しい時期の遺構である可能性も推測できる。

遺構番号	遺構名			出土遺物															製塩土器	その他
	遺構番号	断面番号	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他												
遺構番号	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		
	断面番号	断面名	断面名	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他	土器類	鏡式土器(物)	鏡式土器(器)	製塩土器	その他		

第2節 まとめにかえて

市之郷遺跡では、再開発事業に伴い兵庫県教育委員会及び姫路市教育委員会による大規模な発掘調査が実施されたことにより遺跡全体の様相が明らかとなってきており、遺跡の存続時期である弥生時代から中世までの間に弥生時代中期、古墳時代中期から後期、市之郷塚寺と関連する古墳時代後期末の遺物群など、どの時期をとっても姫路市を代表する遺跡の一つと評価されている。古墳時代中期についても竪穴建物跡を時が明確な遺構だけで4棟確認している。

本調査の主要な成果が古墳時代中期の遺構であることから、当該時期における竪穴建物跡の遺跡全体の様相について、挿表1及び図3-4を元に若干のまとめを行う。

1. 遺跡の分布と立地

市之郷遺跡全体の調査成果と総合して遺構の分布状況を観察すると、姫路市第16次調査では、古墳時代中期の竪穴建物跡は調査区の中央以南に集中し、北側は逆に古墳時代後期の遺構が増加する(図4)。姫路市第16次調査区の北側で実施した兵庫県第3次調査では古墳時代中期の竪穴建物跡は確認されていないことから、第16次調査区付近が古墳時代中期の集落域の北限と考えられる。姫路市第13次・第15次調査及び兵庫県第1次調査の成果から、当該地以東に古墳時代中期を含め、遺構の広がりが自己がほぼ見られず、遺跡及び集落域の東端にあたることからわかる。また西側についてもJR東姫路駅ロータリー建設に伴い実施した第11次・第12次調査において中世以前の明確な遺構はほとんど確認できず、第16次調査でも調査区南西部で河道を検出した。これらのことから図3のとおり古墳時代中期の竪穴建物跡は姫路市第13次・第14次・第16次・第18次調査及び兵庫県第1次調査を実施したJR東姫路駅付近と兵庫県第5次調査を実施したものづくり大学校敷地付近の2ヶ所に集中していることが判明した。また、古墳時代後期の竪穴建物跡は、一部重複する部分もあるものの、第3次、第4次調査付近に集中する傾向があり、中期と後期で集落域の中心範囲が異なることも明らかとなった。

立地条件の特徴としては、姫路市第13次調査、第14次調査、第18次調査では、弥生時代中期の旧河道の上層に古墳時代中期の竪穴建物跡が構築されていた。兵庫県第1次調査についても位置が姫路市第14次調査区の南端であり、同様の状況である。姫路市第16次調査でも遺構検出箇所が砂礫になる箇所でのこの時期の遺構はほとんど見られぬ。このように市之郷遺跡の古墳時代中期の竪穴建物跡は、周辺の既往遺跡でも地質的不安定な場所に構築されていることが多く、遺構検出箇所が砂礫になる比較的高い地点からの検出例は少ない。水田の圃間による割平を受けた可能性も否定できないが、遺構の構築条件の一つである可能性もあり、継続した検討が必要と考える。

2. 構造と建物規模

平面形状は全て方形で、陶器TG232型式併行段階には、床面積10㎡以下の例が存在する。これら小規模の竪穴建物跡は造付けのかまどを備え、須恵器はほぼ出土しないもの韓式系軟質土器が出土する。一方で同時期に35㎡を超す大型の例がみられる。市之郷遺跡の調査では燃焼施設が不明確だったため、姫路市の焼田に所在する畑田遺跡の例を参考として表に掲載した(挿表1A)。これらは、内部施設に古墳時代初期から継続して採用されている中央焼土坑と住居内土坑を備えている。出土物も布留系の甕や小形丸底甕などの土器器のみで構成されている。次の陶器TG232型式-ON231型式併行段階では、床面積が15㎡以下に拡大している。中央焼土坑と住居内土坑を備える大規模な建物跡はなくなり、燃焼施設は造付けのかまどのみになる。陶器TK73型式-TK216型式併行段階になるとさらに平面規模が拡大し、床面積は15㎡を超える。大規模なもので143㎡近くになる例もあるが、20㎡前後が平均的な規模である。陶器TK208型式併行段階には床面積が20㎡を超える例が大半を占め、TK232型式-TK47型式併行段階になると25㎡以上となる。これらのことから、ある程度のばらつきはあるものの、市之郷遺跡の古墳時代中期の竪穴建物跡は徐々に建物規模が大きくなっていく傾向がみられる。ちなみに、古墳時代後期の竪穴建物跡では、床面積は30㎡を超える例が目立つようになることから、古墳時代後期末に建物の大規模化は進むようである。

3. 出土遺物

須恵器生産開始時期にあたる陶器TG232型式併行段階には韓式系軟質土器がまとまって出土する遺構はあるものの、出土遺物は布留系の甕や小形丸底甕、高坏などの土器器が主体を占め、須恵器は甕の部類細片がわずかに出土する程度である。やや時期が下った陶器ON231型式からTK73型式併行段階になると、甕の口縁部や杯、器形がわかる破片の出土が散見される。本調査区周辺でも、姫路市第13次調査S16で直口に近い厚口の甕が口縁から頸部にかけて完形で出土したほか、SK18で甕の口縁部、第1次SD51、SH14などで、器台や甕が報告されている。TK216型式-ON46型式併行段階には、無蓋高杯や蓋、蓋杯など出土量は少ないものの器種が増加する。TK208型式併行段階になると須恵器の出土量が飛躍的に増加し、特に蓋杯や蓋高坏などが多く出土する。土師器は、本報告書では検形と有段高坏のみ掲載しているが、周辺の調査成果や未掲載の破片まで含めると、[文献(13)]の土師器編年表で示された高坏の器種のバリエーションはほぼそろっている。資料の量がまだ少なく一括資料も限られることから、形状や製作技法の細かい差異、器種同士の出土量の比率等の地域性については今後の課題として詳細な検討が必要であるが、須恵器の様相と合わせて土師器も大枠では大坂湾周辺と同様の時期的な組成や形制の変化を追うことができる。韓式系土器には軟質土器である。器種は平底鉢、椀、長脚盃、銅などがみられる。外面の調整はほとんどが格子タタキであるが、姫路市第16次調査S11からは外面調整が縦方向の平行タタキの平底鉢、姫路市第18次S14からは縦方向の平行タタキの長脚盃の破片が出土している。このほか、姫路市第14次調査S11からは、外面調整が縦横文の長脚盃が出土した。この遺構は、市之郷遺跡では韓式系土器がほとんど出土しなくなったTK208型式-TK47型式併行段階の時期があたりとされる。また、市内では市之郷遺跡の竪穴建物跡3棟でのみ報告されているコップ形製土器が出土していること、製土土器の出土状況が他の2例とは異なり、[扉部北遺跡I][文献(29)]で報告されている扉部北遺跡Ⅲ期における製土土器の出土状況に類似している点でも特徴的である。しかし、今のところ周辺に比較できる資料がなく、事例を挙げるのみにとどめる。

姫路市内には、初期須恵器や韓式系土器が出土した遺跡が点在し、市之郷遺跡周辺だけでなく宮山古墳、小幡方遺跡、因分寺古墳遺跡、豊沢遺跡、小山遺跡、畑田遺跡等があげられる(図1)。しかし、宮山古墳は馬具、鉄鉋、垂飾付耳輪などの渡来系遺物とともに、陶器TK73型式の初期須恵器が出土したことから著名なものである。古墳の資料である。また、その他の遺跡については、土坑や溝からの一括資料であるが、遺跡の調査範囲が部分的であったり、出土量が少量で遺構に伴わない、整理作業が進んでいない等、詳細なデータがそろっていない。本来であれば遺跡内だけでなく、周辺との比較検討を行うことが望ましいが、今のところ姫路市内の古墳時代中期の集落遺跡で詳細な報告がなされているのは市之郷遺跡のみであることから、今後の資料の増加、整理作業の進展を待って検討を継続していく。

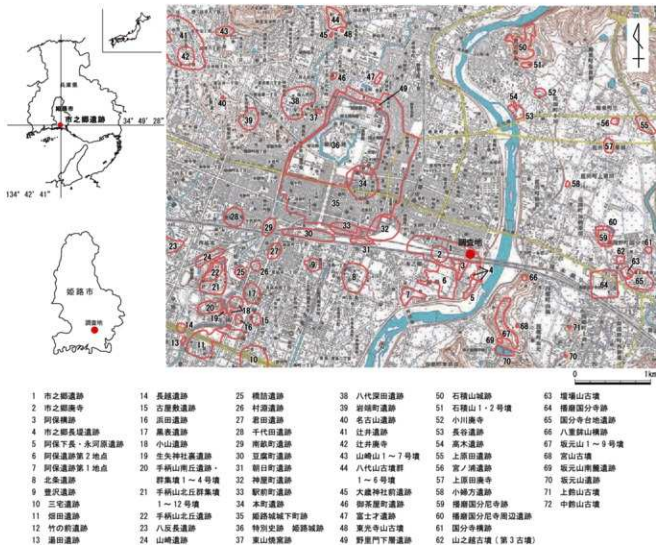


図1 調査の位置と周辺の遺跡 S=1:50,000

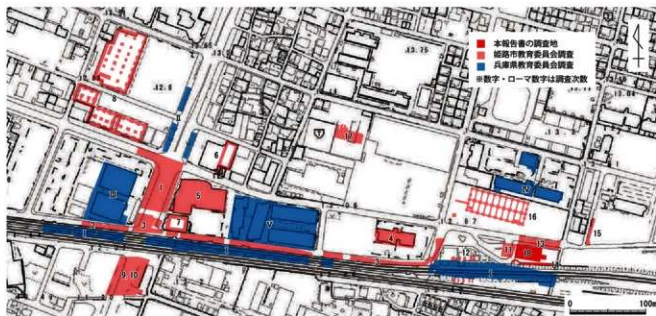


図2 市之郷遺跡の既往調査箇所位置図 S=1:5,000

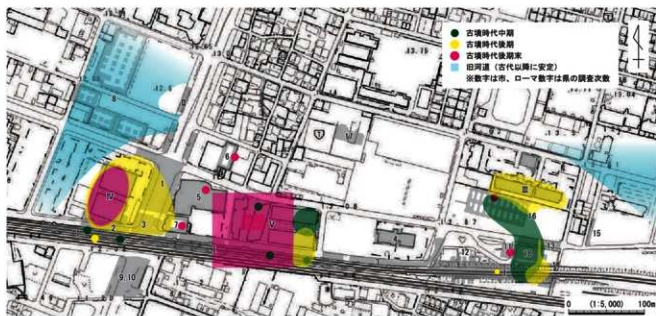


図3 古墳時代の遺構分布 1:5000

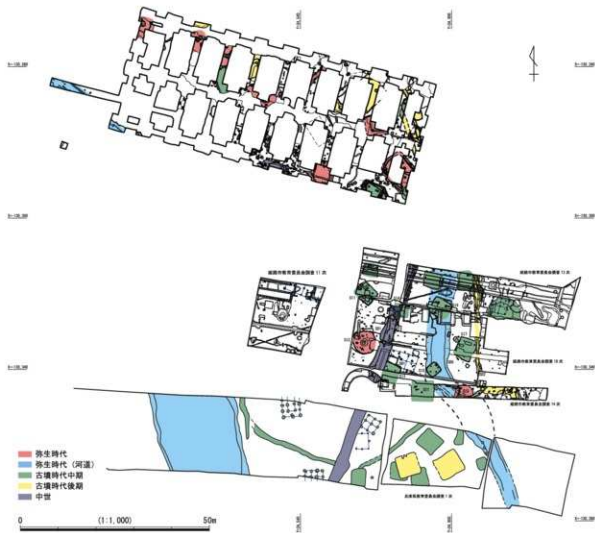


図4 市之郷遺跡東部 時期別主要遺跡分布図 S=1:1,000

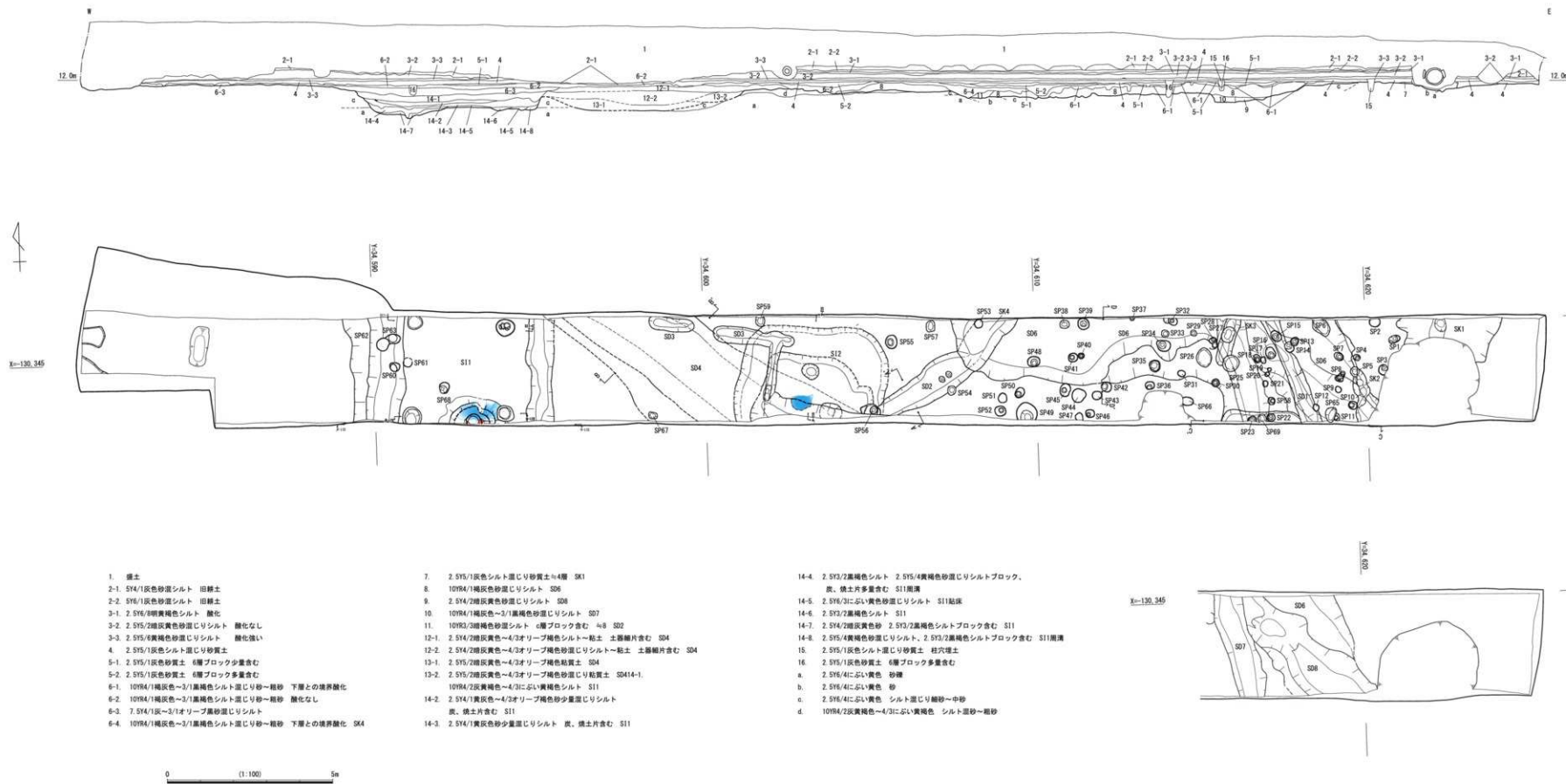


図5 第14次 全体図 S=1:100

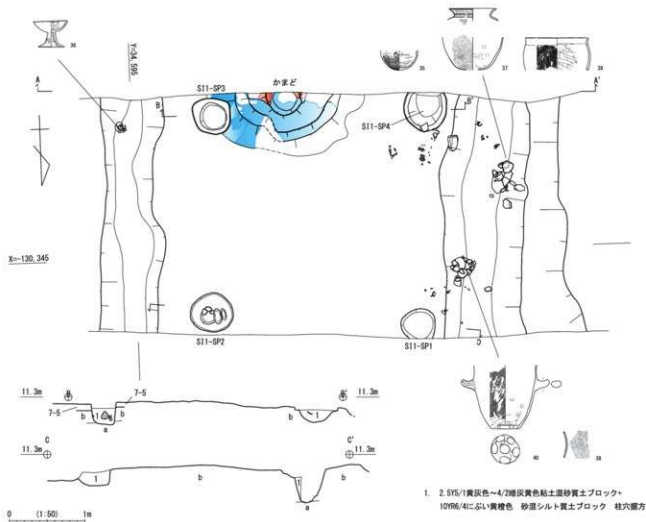
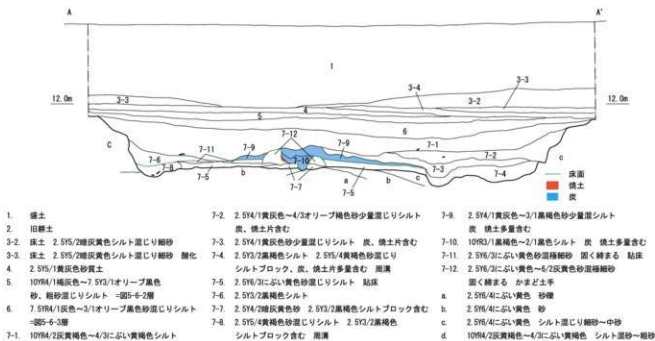


図6 第14次 S11 S=1:50

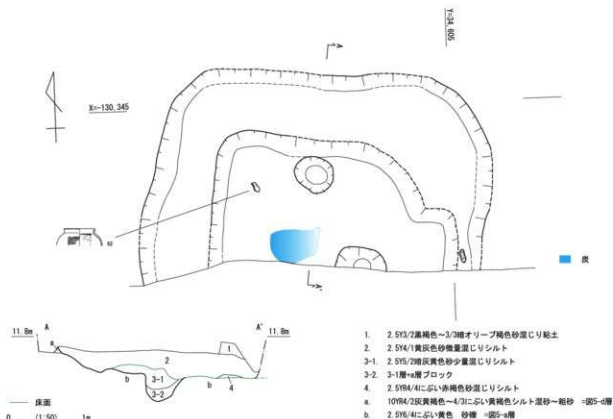
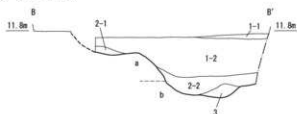


図7 第14次 S12 断面図 S=1:50



1. 10YR3/3暗褐色 砂混シルト
2. 2.5Y6/2灰黄色～7/3黄黄色 シルト混粗砂～砂層
- a. 2.5Y6/4にぶい黄色 シルト混じり細砂～中砂 =図5-c層



- 1-1. 2.5Y4/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色シルト～粘土 土器細片含む
- 1-2. 2.5Y4/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色砂混じりシルト～粘土 土器細片含む
- 2-1. 2.5Y5/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色粘質土
- 2-2. 2.5Y5/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色砂混じり粘質土
3. 2.5Y5/2～4/3 砂層
- a. 2.5Y6/4にぶい黄色 シルト混じり細砂～中砂 =図5-c層
- b. 2.5Y6/4にぶい黄色 砂混 =図5-a層

図8 第14次 SD2 断面図 S=1:50

図9 第14次 SD4 断面図 S=1:50



1. 盛土 (埋立)
2. 2.5Y6/2灰黄褐色砂混シルト 炭片含む SP23
3. 10YR4/1暗灰色砂混じりシルト SD6
- 3' 3層+α層ブロック
4. 10YR4/1暗灰色～3/1黒褐色砂混じりシルト SD7
5. 2.5Y4/2暗灰黄色砂混じりシルト SD8

- a. 2.5Y6/4にぶい黄色 シルト混じり細砂～中砂 =図5-c層
- b. 2.5Y6/4にぶい黄色 砂 =図5-b層

0 (1:50) 1m

図10 第14次 SD6 断面図 S=1:50



图11 第18次 全体图 S=1:100

0 (1:100) 5m

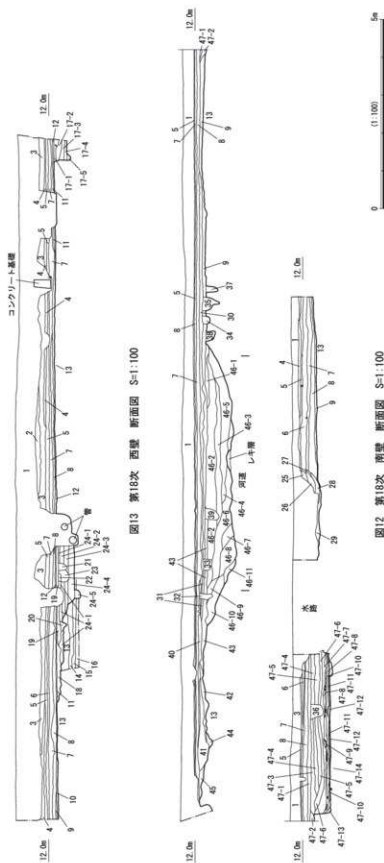
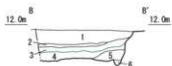
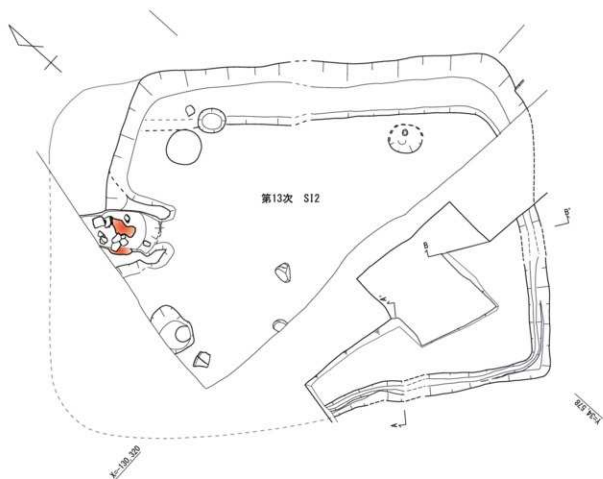


図13 第18次 西壁 断面図 S-1:100

図12 第18次 南壁 断面図 S-1:100

- | | | | |
|-----------------------------|----------------------|-----|--------------------------------|
| 1. 土 | 17-1. 10784/4黄色砂 | 511 | 31. 10784/3にふい黄色砂層砂混じりシルト |
| 2. 田積土 | 2. 575/4黄色砂 | 511 | 32. 10784/25黄色砂 |
| 3. 10784/25黄色砂 | 2. 575/4黄色砂 | 511 | 33. 2. 576/4にふい黄色砂 |
| 4. 10784/7黄灰色砂層砂混じりシルト | 2. 574/7黄灰色砂層砂混じりシルト | 505 | 34. 2. 574/2戻り黄色砂 |
| 5. 2. 575/4黄色砂層砂混じりシルト | 2. 574/2戻り黄色砂 | 505 | 35. 2. 574/2戻り黄色砂 |
| 6. 2. 575/4黄色砂 | 2. 575/4黄色砂 | 513 | 36. 2. 575/4黄色砂 |
| 7. 2. 575/4黄色砂 | 2. 575/4黄色砂 | 513 | 37. 2. 575/4黄色砂 |
| 8. 2. 575/3にふい黄色砂層砂混じりシルト | 2. 574/3ブルー砂 | 513 | 38. 2. 575/3黄色砂 |
| 9. 10785/6黄色砂層砂混じりシルト | 2. 575/3黄色砂 | 513 | 39. 2. 575/3黄色砂 |
| 10. 2. 576/6黄色砂層砂混じりシルト | 2. 575/3黄色砂 | 513 | 40. 2. 575/3黄色砂 |
| 11. 2. 576/6黄色砂層砂混じりシルト | 2. 575/3黄色砂 | 513 | 41. 10784/25黄色砂 |
| 12. 2. 574/3ブルー砂 | 2. 575/3黄色砂 | 513 | 42. 10785/3にふい黄色砂 |
| 13. 2. 574/3ブルー砂 | 2. 575/3黄色砂 | 513 | 43. 10785/3にふい黄色砂 |
| 14. 2. 574/3ブルー砂 | 2. 575/3黄色砂 | 513 | 44. 2. 574/2戻り黄色砂 |
| 15. 2. 574/3ブルー砂 | 2. 575/3黄色砂 | 513 | 45. 2. 574/2戻り黄色砂 |
| 16. 2. 574/3ブルー砂 | 2. 575/3黄色砂 | 513 | 46. 2. 574/2戻り黄色砂 |
| 17-1. 10784/25黄色砂層砂混じりシルト | 2. 575/2黄色砂 | 505 | 46-1. 2. 574/3ブルー砂 |
| 17-2. 10784/25黄色砂層砂混じりシルト | 2. 575/2黄色砂 | 505 | 46-2. 10785/3にふい黄色砂 |
| 17-3. 10785/3にふい黄色砂層砂混じりシルト | 2. 574/3黄色砂 | 505 | 46-3. 10784/25黄色砂層砂混じりシルト |
| | | | 46-4. 2. 575/3黄色砂 |
| | | | 46-5. 2. 575/3黄色砂 |
| | | | 46-6. 10784/25黄色砂層砂混じりシルト、部分沈着 |
| | | | 46-7. 2. 574/2戻り黄色砂、小層含む |
| | | | 46-8. 10784/3にふい黄色砂層砂混じりシルト |
| | | | 47-1. 10784/25黄色砂層砂混じりシルト |
| | | | 47-2. 2. 575/4黄色砂 |
| | | | 47-3. 2. 575/2戻り黄色砂 |
| | | | 47-4. 10784/25黄色砂 |
| | | | 47-5. 10784/25黄色砂 |
| | | | 47-6. 10784/3にふい黄色砂 |
| | | | 47-7. 10784/4黄色砂 |
| | | | 47-8. 7. 576/6黄色砂 |
| | | | 47-9. 10784/3にふい黄色砂層砂混じりシルト |
| | | | 47-10. 10784/4黄色砂 |
| | | | 47-11. 10785/3黄色砂 |
| | | | 47-12. 10784/25黄色砂層砂混じりシルト |
| | | | 47-13. 10784/25黄色砂層砂混じりシルト |
| | | | 47-14. 10785/3にふい黄色砂 |



1. 10YR4/2 灰黄褐色細砂
2. 10YR4/3 にぶい 黄褐色細砂 混じり シルト
3. 10YR5/3 にぶい 黄褐色細砂 混じり シルト
4. 10YR4/4 褐色極細砂 混じり シルト
5. 2.5Y5/3 黄褐色細砂
6. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂

— 床面

図14 第18次 S11 S=1:50

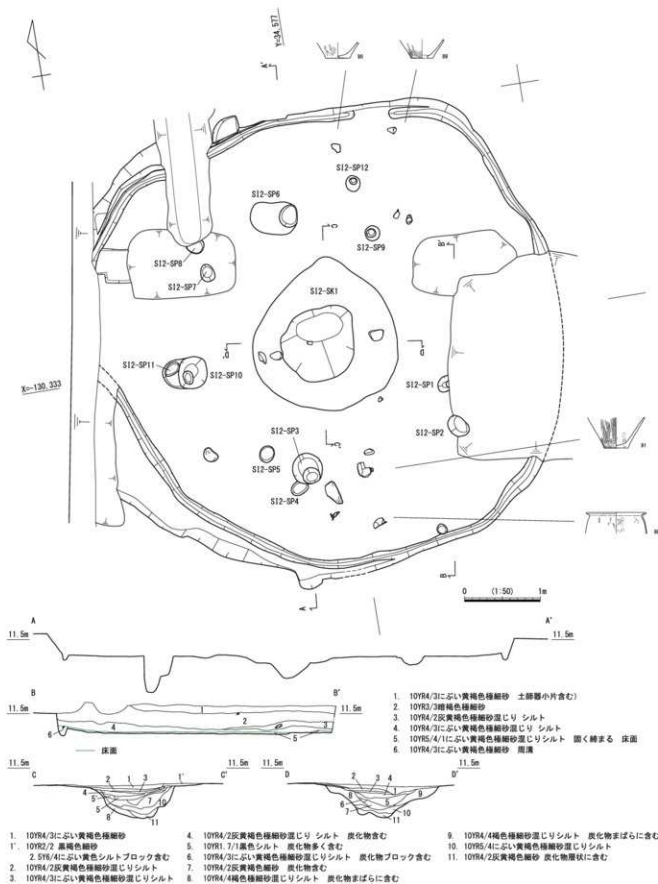
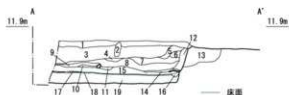
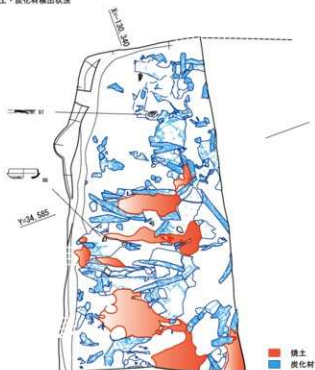


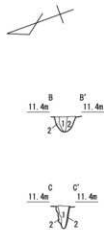
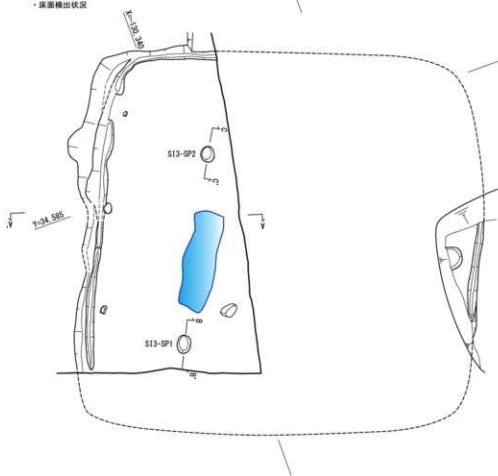
図15 第18次 S12 S=1:50

・焼土・炭化材検出状況



1. 2.5Y3/3緑オリーブ褐色極細砂 土器片・炭化物含む
2. 10YR3/2黄褐色極細砂 ビット埋土か? 乱遺構
3. 10YR3/3暗褐色極細砂～細砂 炭化物・土器片少量含む
4. 10YR3/4暗褐色細砂混じリシルト 焼土を層状に含む
5. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 焼土・炭化物を多量含む
6. 10YR4/2にぶい黄褐色細砂
7. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
8. 10YR4/2暗灰色細砂混じリシルト
9. 10YR2/3黒褐色極細砂混じリシルト 焼土・炭化物を多量に含む
10. 焼土
11. 炭
12. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じリシルト 焼土・炭化物を多量に含む
13. 10YR4/2灰黄褐色細砂 焼土・炭化物を少量含む
14. 焼土
15. 炭化材
16. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 焼土・炭化物を含む 周溝
17. 炭化物 (層状に検出)
18. 10YR3/4暗褐色極細砂 硬く固まっている 床面
19. 10YR4/2灰黄褐色細砂混じリシルト 炭化物・土器小片を含む

・床面検出状況



1. 10YR3/2灰黄褐色細砂
炭化物・焼土を含む
下層に炭化物層状に含む 柱礎
2. 10YR4/3にぶい黄褐色極細砂混じリシルト
炭化物少量含む

0 (1:50) 1m

図16 第18次 S13 S=1:50

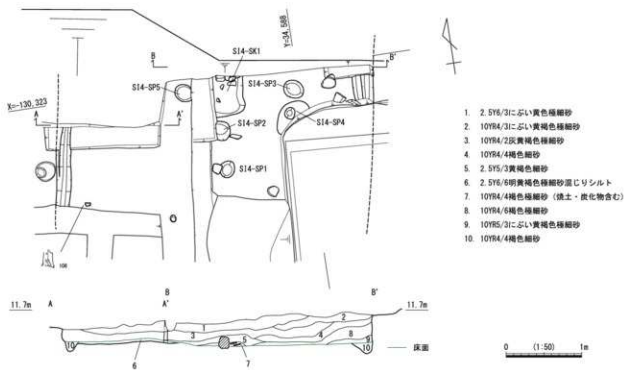


図17 第18次 S14 S=1:50

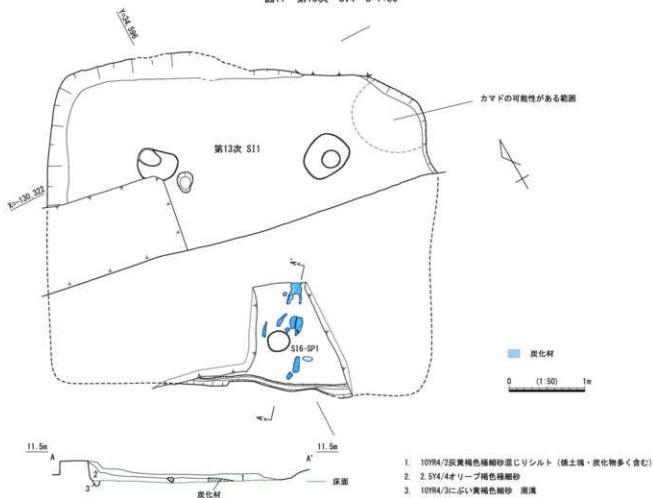


図18 第18次 S16 S=1:50・S=1:25

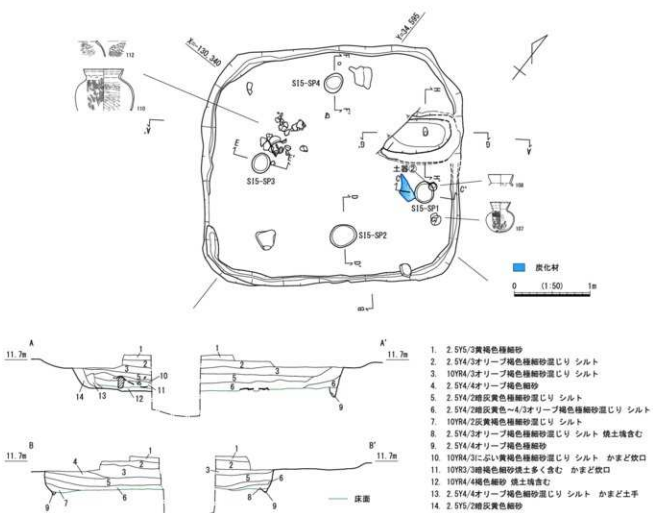


図19 第18次 S15 S=1:50

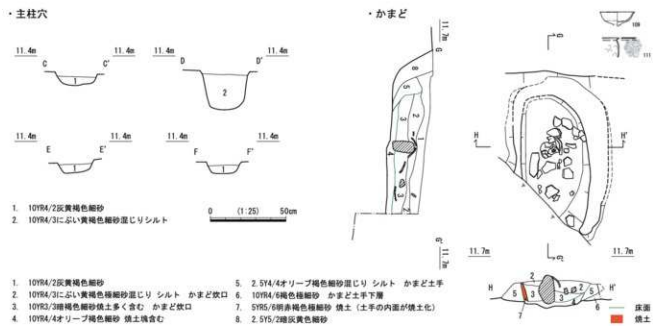


図20 第18次 S15 主柱穴、かまど S=1:25

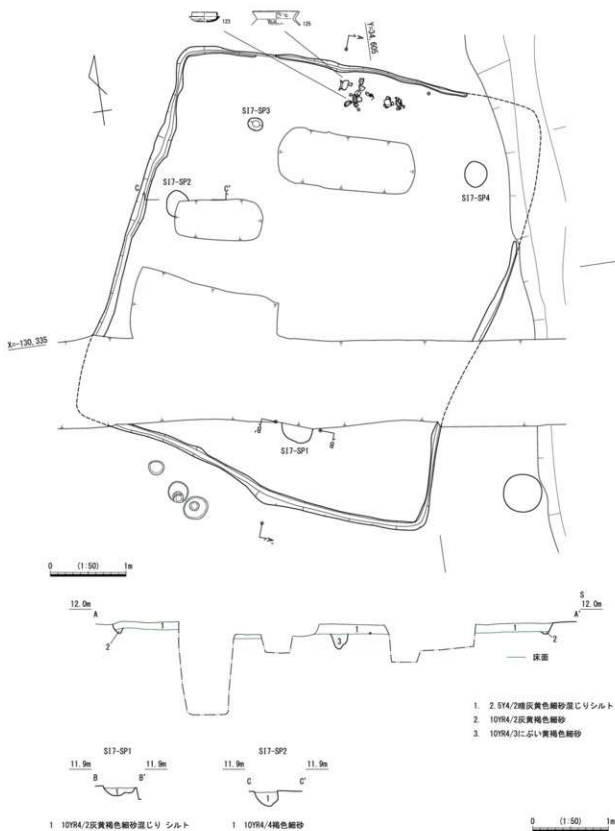
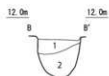


図21 第18次 S17 S-1:50



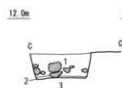
2. 5Y4/2暗灰黄色細砂

図22 第18次 SK1断面図 S=1:50



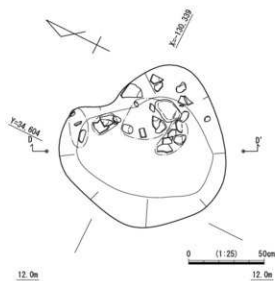
2. 5Y4/2暗灰黄色細砂混じりシルト
2. 5Y3/3暗オリーブ褐色細砂混じりシルト

図23 第18次 SK2断面図 S=1:50



- 10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じりシルト
2. 5Y4/2暗灰黄色シルト
- 5Y5/2灰オリーブ色極細砂混じりシルト S04埋土

図24 第18次 SK3断面図 S=1:50



2. 5Y3/3暗オリーブ褐色極細砂

図25 第18次 SK5 S=1:25

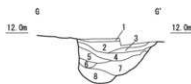


2. 5Y8/3にぶい黄褐色細砂
2. 5Y5/4黄褐色細砂
2. 5Y4/2暗灰黄色細砂 土師器破片含む

図26 第18次 SD1断面図 S=1:50



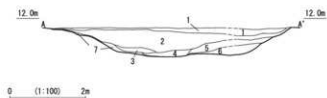
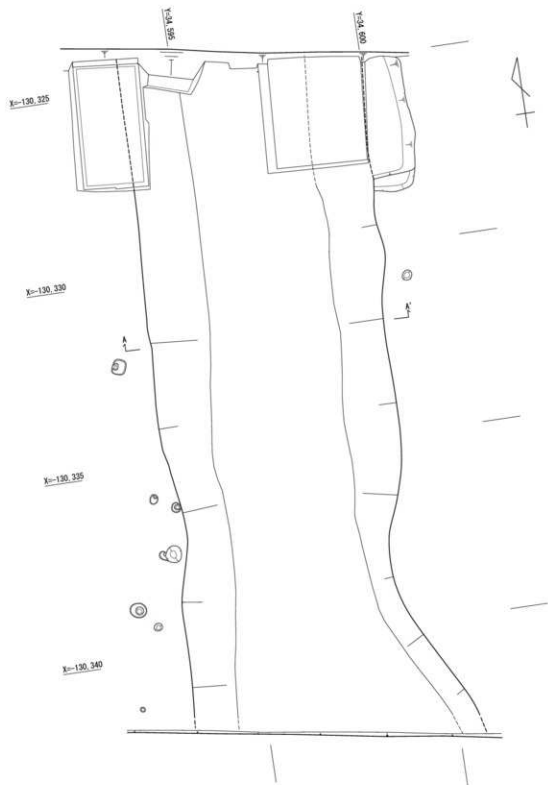
2. 5Y4/3オリーブ褐色細砂 下層に鉄分沈着
2. 5Y3/3黒褐色 細砂



- 10YR5/2灰黄色細砂～中砂
2. 5Y4/4オリーブ褐色細砂
- 10YR4/2灰黄褐色細砂
- 10YR5/3にぶい黄褐色細砂
- 10YR4/3にぶい黄褐色極細砂
- 10YR4/4褐色極細砂
- 10YR3/4暗褐色極細砂混じりシルト
- 10YR2/2黒褐色細砂混じりシルト

0 (1:50) 1m

図27 第18次 SD2断面図 S=1:50



1. 2.5Y4/3オリーブ褐色極細砂 土器片含む
2. 10YR5/2灰黄色細砂 小礫含む
3. 10YR4/4褐色細砂～極細砂
4. 10YR5/2灰黄色極細砂混じりシルト 鉄分沈着
5. 2.5Y5/3黄褐色細砂
6. 2.5Y4/3オリーブ褐色中砂～粗砂
7. 10YR4/3にがい黄褐色細砂

図28 第18次 S05 S=1:100

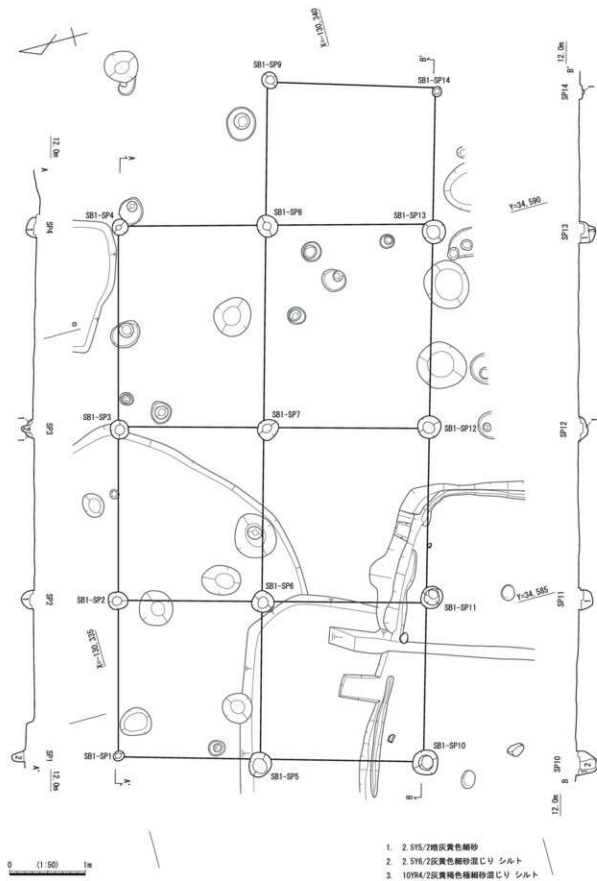


図29 第18次 SBI S-1:50

S11

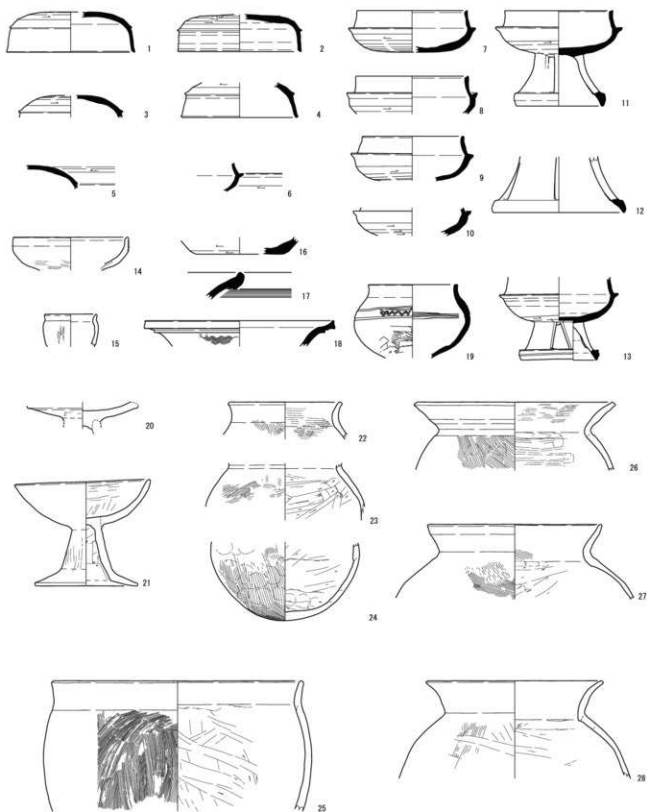


图30 第14次 出土遺物実測図1 S=1:4

0 (1:4) 10cm

S11

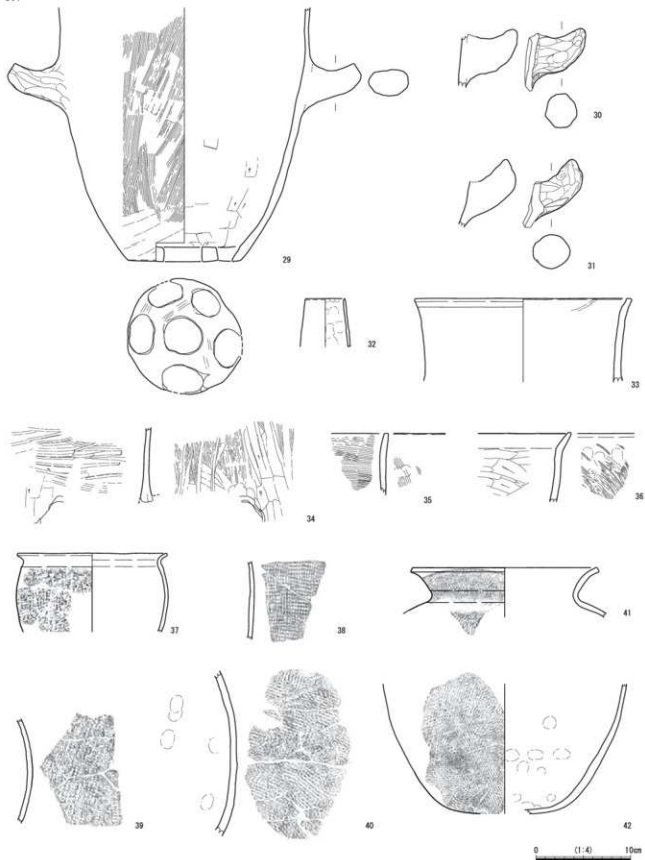
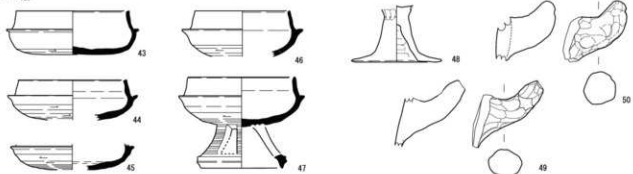
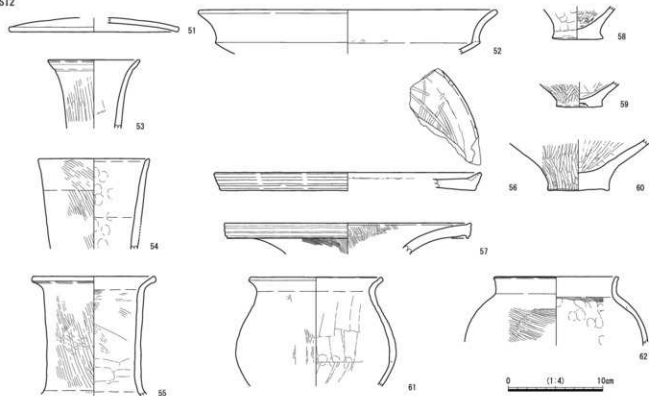


图31 第14次 出土遺物実測図2 S=1:4

S11上層



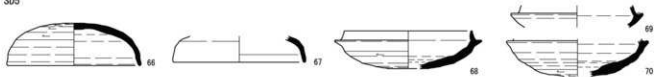
S12



SD4



SD5



SP6



SP8



SP39



SP14



SP59



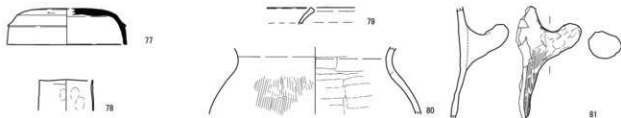
SP5



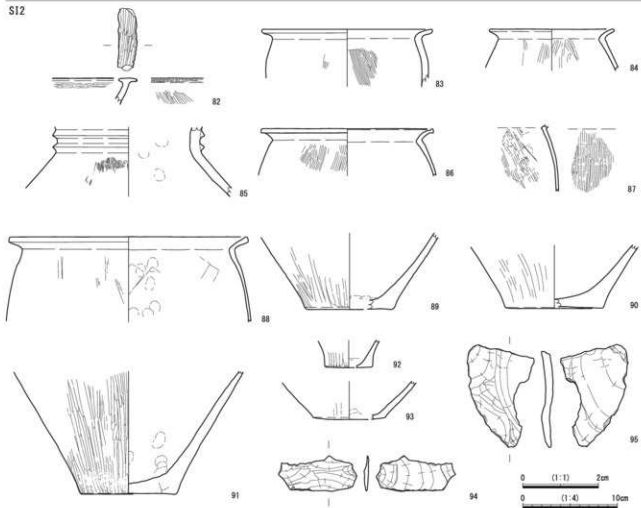
75

图32 第14次 5出土遺物実測圖3 S=1:4

S11



S12



S13

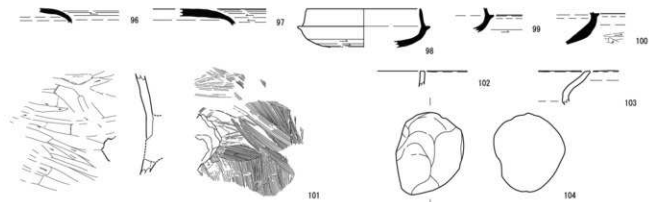
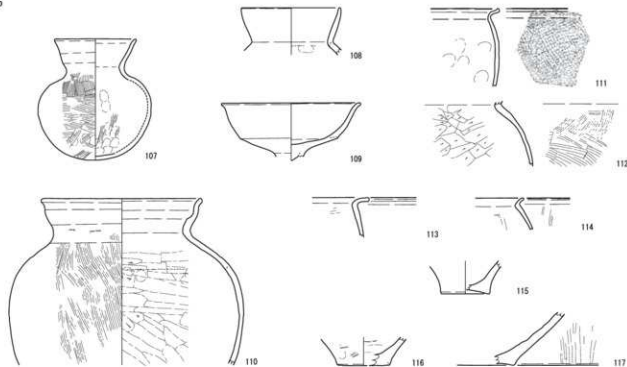


图33 第18次 出土遺物実測図1 S=1:4 [94, 95, 104・S=1:1]

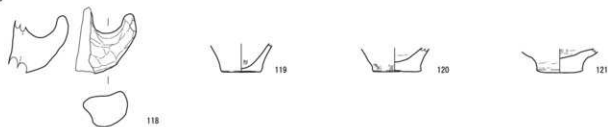
S14



S15



S16



S17

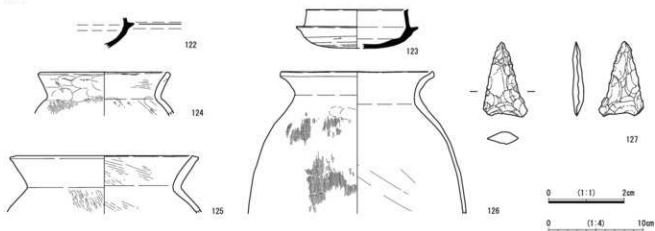


图34 第18次 出土遺物実測図2 S=1:4 [127・S=1:1]

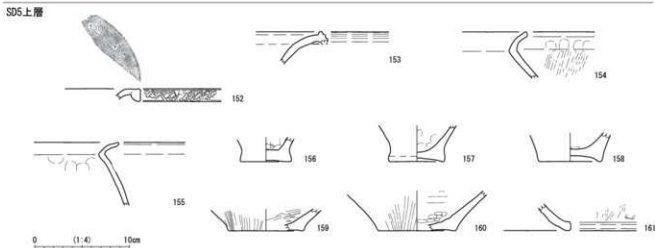
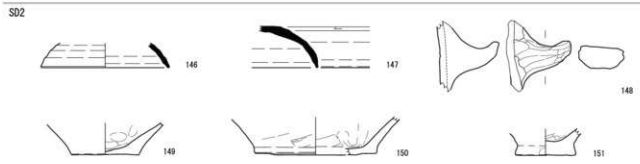
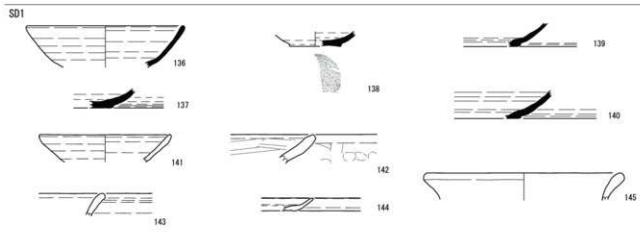
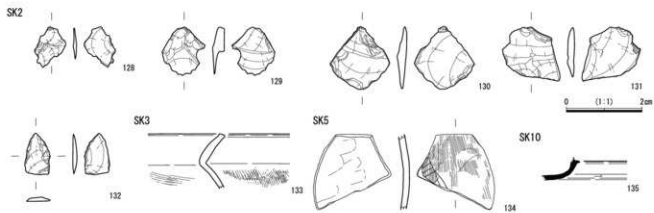
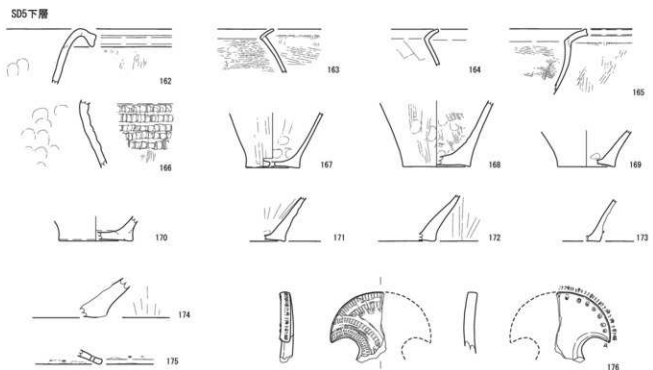


图35 第18次 出土遺物実測図3 S=1:4 [128~132・S=1:1]



SD5最下層

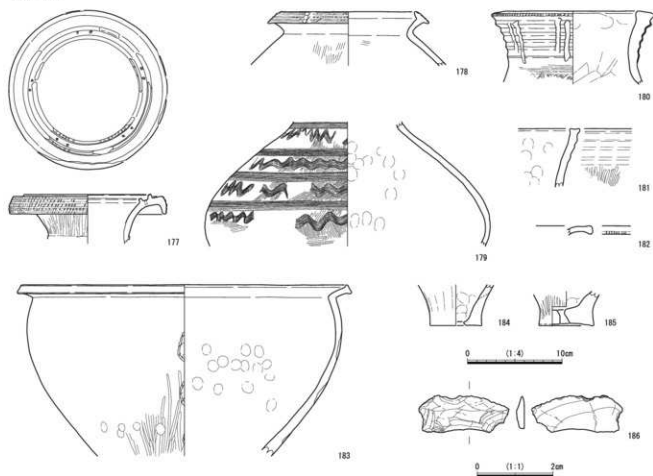
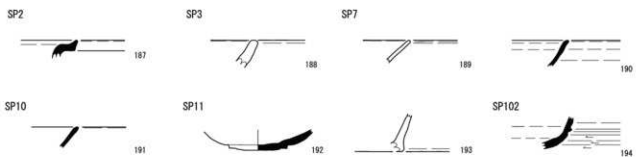


图36 第18次 出土遺物実測図4 S=1:4 [186・S=1:1]



包含層

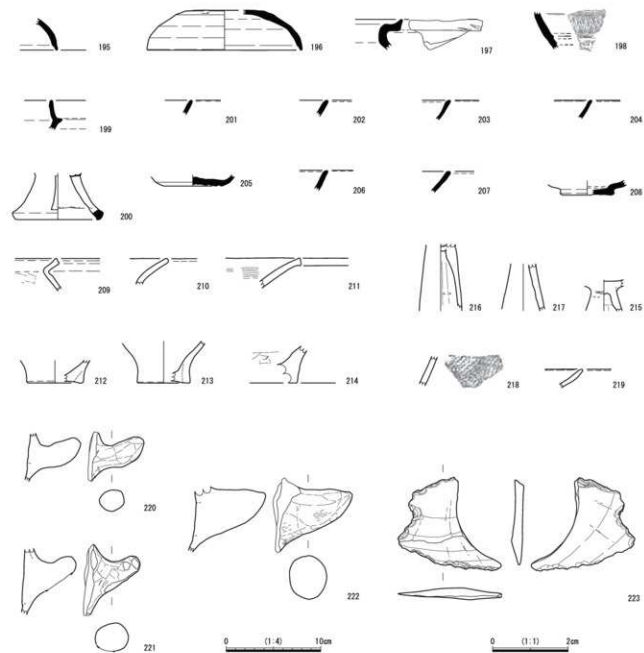


图37 第18次 出土遺物実測図5 S=1:4 [223・S=1:1]



写真1 調査区遠景(北から)



写真2 調査区遠景(南から)



写真3 第14次 調査区全景(西から)※右はフォトスキャンによるオルソ画像



写真4 第14次 S11(西から)



写真5 第14次 S11調査区北壁断面(南東から)



写真6 第14次 S11 調査区南壁断面(北西から)



写真7 第14次 S11No.1出土状況(南から)



写真8 第14次 S11No.2出土状況(東から)



写真9 第14次 S11No.3出土状況(西から)



写真10 第14次 S11かまど検出状況(北から)



写真11 第14次 S12(北から)



写真12 第14次 S12断面(北西から)



写真13 第14次 SD1 (北から)



写真14 第14次 SD2 (北から)



写真15 第14次 SD1付近調査区北壁断面(南西から)



写真16 第14次 SD4断面(南東から)



写真17 第14次 SD7、SD8(北から)



写真18 第18次 調査区近景(東から)



第
18
次

写真19 第18次 調査区近景(西から)



写真20 第18次 調査区全景(上が東)



写真21 第18次 SI1(東から)



写真22 第13次 SI2(東から)※第18次 SI1と同一遺構



写真23 第18次 SI2(北から)



写真24 第18次 S13炭化材出土状況 (西から)



写真25 第18次 S13炭化材(北から)



写真26 第18次 S13南部(南から)



写真27 第18次 S13断面(東から)



写真28 第18次 S13床面検出状況(西から)



写真29 第18次 S14(西から)



写真30 第18次 S15(南西から)



写真31 第18次 S15かまど遺物出土状況 (南西から)



写真32 第18次 S15かまど完掘状況(南西から)



写真33 第18次 S15かまど断割り断面(南西から)



写真34 第18次 S15床面遺物検出状況1(北から)



写真35 第18次 S15床面遺物検出状況2(北から)



写真36 第18次 S16(東から)



写真37 第13次 S11(東から)※第18次 S16と同一遺構



写真38 第18次 S17(南から)



写真39 第18次 S17遺物出土状況(西から)



写真40 第18次 SK1断面(南から)



写真41 第18次 SK2断面(北から)



写真42 第18次 SK3断面(北から)



写真43 第18次 SK5(南西から)



写真44 第18次 SD1断面(南から)



写真45 第18次 SD2断面(北から)



写真46 第18次 SD2 (南から)



写真47 第18次 SD5(南から)



写真48 第18次 SD5断面(南から)



写真49 第18次 SP3断面(北から)



写真50 第18次 SP10断面(南から)



写真51 第18次 SP11断面(南から)



写真52 第18次 SP13断面(南から)



写真53 第18次 SB1(西から)



13



47



11



19



1



44



43



46



29



41



21



37



32



32



51



52



62



55



61



54



73



75



写真57 第18次 出土遺物1 ※数字は実測図番号に準ずる

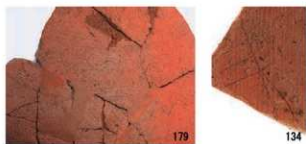


写真58 第18次 出土遺物2 ※数字は実測図番号に準ずる

〔引用・参考文献〕

- (1) 今里幾次「播磨市之郷弥生式遺蹟の研究」『古代文化』14-9 1962 日本古代文化学会
- (2) 鎌木義昌「市之郷遺跡発掘調査概報」『姫路市埋蔵文化財調査報告書』1971 姫路市埋蔵文化財調査団
- (3) 鎌谷木三「市之郷殿寺」『播磨上代寺院誌の研究』1942 成武堂
- (4) 韓式系土器研究会編『韓式系土器研究Ⅰ』1987 韓式系土器研究会
- (5) 小森俊寛・上村憲章「京から出土する土器の編年的研究」2005 京都編集工房
- (6) 酒井清治「日韓の版の系譜から見た渡来人」『橋崎彰一先生古希記念論文集』1998 真陽社
- (7) 柴原拓「津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年—古市古墳群周辺集落の土器様相とその特質—」
『大阪文化財研究第50号』2017 (公財)大阪府文化財センター
- (8) 杉井健「版形土器の地域性」『国家形成期の考古学』1999 大阪大学考古学研究室
- (9) 多賀茂治「玉津田中遺跡の堅穴住居について」『玉津田中遺跡第6分冊』1996 兵庫県教育委員会
- (10) 田辺昭三他「陶邑古宮跡Ⅰ」1966 平安学園考古学クラブ
- (11) 第19回播磨考古学研究会実行委員会編『須恵器生産からみた播磨』記録集 2018 播磨考古学研究会
- (12) 第21回播磨考古学研究会実行委員会編『製塩土器からみた播磨』資料集 2020 播磨考古学研究会
- (13) 辻美紀「古墳時代中期・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』1999 大阪大学考古学研究室
- (14) 辻美紀「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原道跡発掘調査報告Ⅱ』2002 (財)大阪市文化財協会
- (15) 寺井誠「日本列島における出現期の版の版地に関する基礎的研究」2016
平成25～27年度 (財)日本学術振興会科学研究費補助金基礎研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書
- (16) 寺井誠「4～5世紀の近畿地域を中心とした土器と渡来人集落」『日韓4～5世紀の土器・鉄器生産と集落』2016
『日韓交渉の考古学—古墳時代—』研究会
- (17) 中野咲「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『考古学論叢』(榎原考古学研究所紀要第33冊) 2010
奈良県立榎原考古学研究所
- (18) 長友朋子・田中元浩「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年—播磨編—』
(大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号) 2007 大手前大学史学研究所
- (19) 日本考古学協会2003年滋賀大会実行委員会編『渡来人の受容と生産組織』(日本考古学協会2003年滋賀大会資料) 2003 日本考古学協会
- (20) 日本中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』1995 日本中世土器研究会
- (21) 日本中世土器研究会編『中世土器の基礎研究』26 2015 日本中世土器研究会
- (22) 森内秀造「平安時代の商業生産—播磨地方の須恵器生産を中心に—」『北山茂夫追悼日本史学論集 歴史における政治と民衆』1986 日本史論叢書
- (23) 森田稔「東播磨中世須恵器生産の成立と展開—神出古宮跡群を中心に—」『神戸市立博物館 研究紀要』第3号 1986 神戸市立博物館
- (24) 山本三郎「兵庫県(播磨・摂津)」『日本土器製法研究』1994 青木書店
- (25) 「陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第75輯) 1993 大阪府教育委員会 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- (26) 「陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第90輯) 1995大阪府教育委員会 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- (27) 「陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第10集) 1996 大阪府教育委員会 (財)大阪府文化財調査研究センター
- (28) 「野々井西遺跡・ON231号竈跡」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第86輯) 1994 大阪府教育委員会 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- (29) 「産屋北遺跡Ⅰ」(大阪府埋蔵文化財調査報告2009-3)2010 大阪府教育委員会
- (30) 「市之郷遺跡Ⅰ」(兵庫県文化財調査報告第286冊)2005 兵庫県教育委員会
- (31) 「市之郷遺跡Ⅱ」(兵庫県文化財調査報告第372冊)2010 兵庫県教育委員会
- (32) 「市之郷遺跡Ⅲ」(兵庫県文化財調査報告第406冊)2011 兵庫県教育委員会
- (33) 「市之郷遺跡Ⅳ」(兵庫県文化財調査報告第433冊)2012 兵庫県教育委員会
- (34) 「市之郷遺跡Ⅴ」(兵庫県文化財調査報告第454冊)2014 兵庫県教育委員会
- (35) 「(仮称)姫路駅周辺第3地点遺跡(第2次調査)」『TSUBOHORI 平成9年度(1997)』(姫路市埋蔵文化財調査略報) 1999 姫路市教育委員会
- (36) 「(仮称)姫路駅周辺第3地点遺跡(すこやかセンター建設に伴う)」『TSUBOHORI 平成13年度(2001)』(姫路市埋蔵文化財調査略報)2003 姫路市教育委員会
- (37) 「(仮称)姫路駅周辺第3地点遺跡 キュスティ21住宅建設予定地」『TSUBOHORI 平成12年度(2000)』(姫路市埋蔵文化財調査略報)2002 姫路市教育委員会
- (38) 「市之郷遺跡第16次発掘調査報告書」(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第59集) 2018 姫路市教育委員会
- (39) 「市之郷遺跡第13次発掘調査報告書」(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第73集) 2019 姫路市教育委員会
- (40) 「村東遺跡—姫路市英賀保駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ—」(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第56集) 2018 姫路市教育委員会
- (41) 『姫路市史』第2巻 1970 姫路市役所
- (42) 『姫路市史』第7巻下(資料編考古) 2010 姫路市役所

報告書抄録

ふりがな	いちのこういせきだい14じ・だい18じはつくつちようさほうこくしょ							
書名	市之郷遺跡第14次・第18次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第88集							
編著者名	小柴 治子・関 梓							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地1 TEL.(079)252-3950							
発行年月日	令和2年(2020年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
いちのこういせき 市之郷遺跡	兵庫県姫路市 市之郷字長埜 1237番8地	28201	020462	34° 49' 28"	134° 42' 41"	第14次：2015. 12.9～2016.1.9 第18次：2017. 10.24～2018.1.24	第14次：132㎡ 第18次：666㎡	水路付替 集合住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号			
市之郷遺跡	集落跡	弥生時代	河道 竪穴建物跡	弥生土器、分銅形土製品	第14次：20150403 第18次：20170303			
		古墳時代	竪穴建物跡、土坑、溝	須恵器、土師器、 韓式系軟質土器、製塩土器				
		奈良時代	溝	土師器				
		中世	掘立柱建物跡、柱穴、溝	須恵器、土師器、陶磁器				
概要	弥生時代から中世の遺構を検出した。なかでも古墳時代中期を中心とした比較的限られた時期での継続した遺構の分布が把握でき、周辺で実施した姫路市第13次・第16次調査及び兵庫県第1次調査・第3次調査の成果と合わせて、市之郷遺跡における古墳時代中期の集落域をほぼ確定することができ、市之郷遺跡における集落域の推移と渡来系文化の受容と浸透過程を考える上での資料が増加した。また、既往調査成果と合わせて当該地の大部分が弥生時代中期頃までに徐々に埋没していった河道の範囲にあたり、古墳時代中期以降の竪穴建物跡が、比較的脆弱な地盤の上に構築されていることが判明した。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第88集

市之郷遺跡第14次・18発掘調査報告書

編 集 姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地1

発 行 姫路市教育委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

発 行 日 令和2年(2020年)3月31日

印刷・製本 内海印刷株式会社

〒670-0808 兵庫県姫路市白国5-8-4